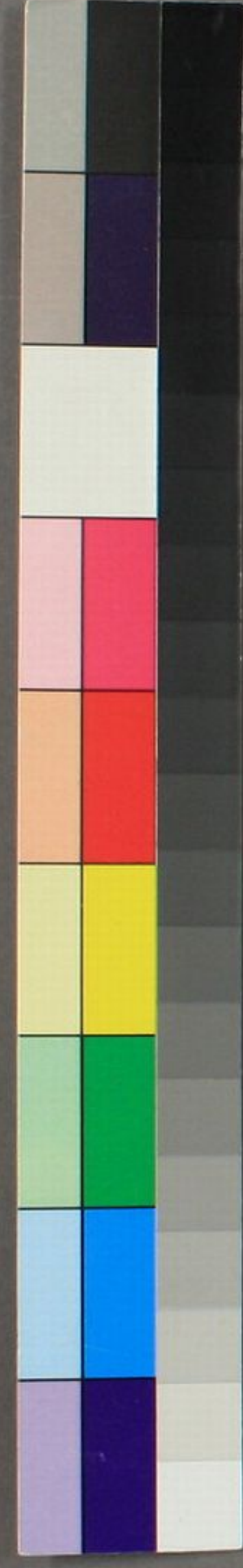


春城漫談

北城新報所載
昭和五年十二月

42

特別
14
1919
655



特
門 14
號 1919
卷 42

~~門 15
號 1880
卷 42~~

寄園雜草

兌眉會詩室藏

昭和六年十月五日
市島謙吉氏

No. 1

刊夕 北越新報

日五月二十

社報新越北
目丁二町上之坂市海長
邸吉野橋佐

春城漫談

市島春城

筆者自から



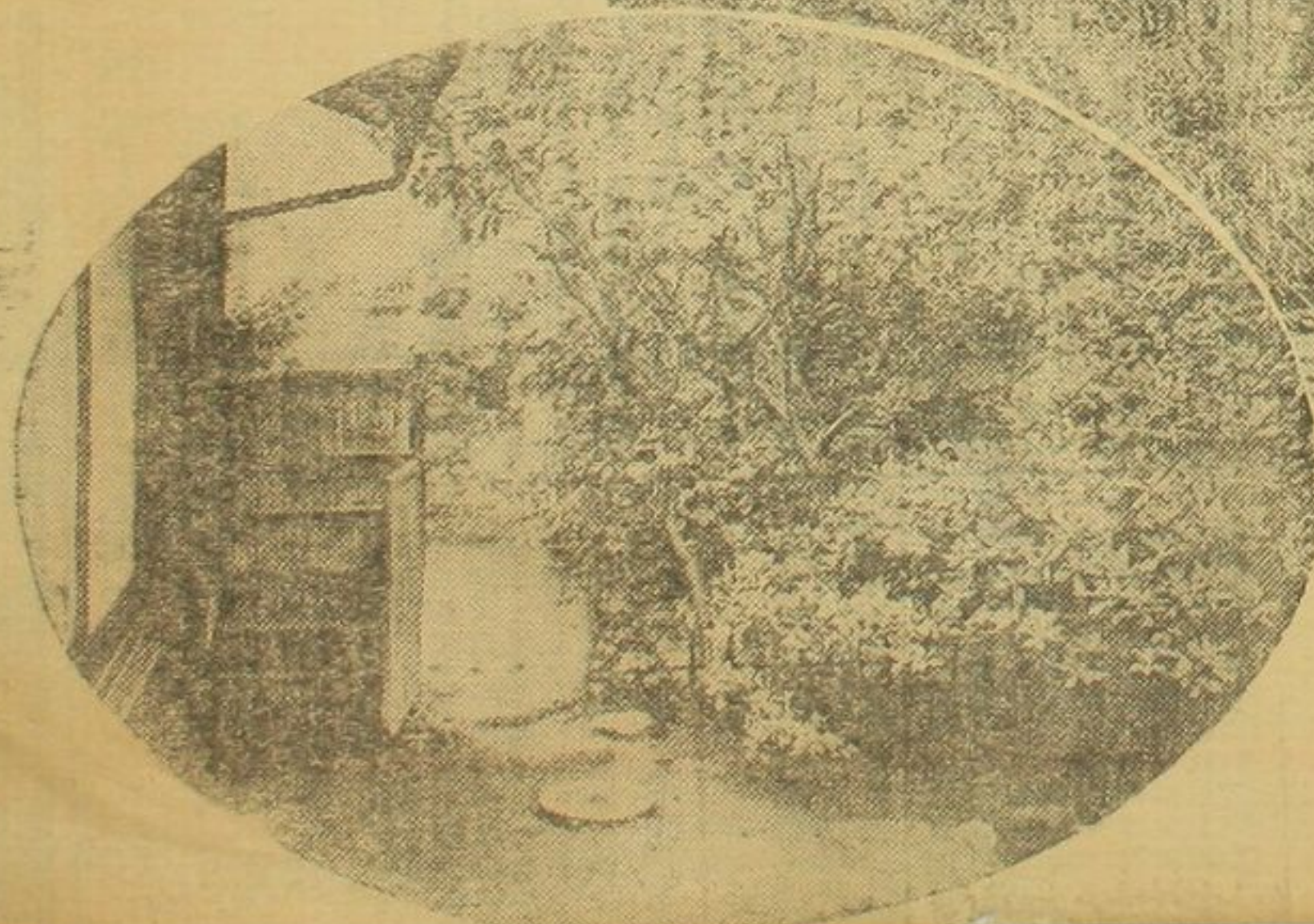
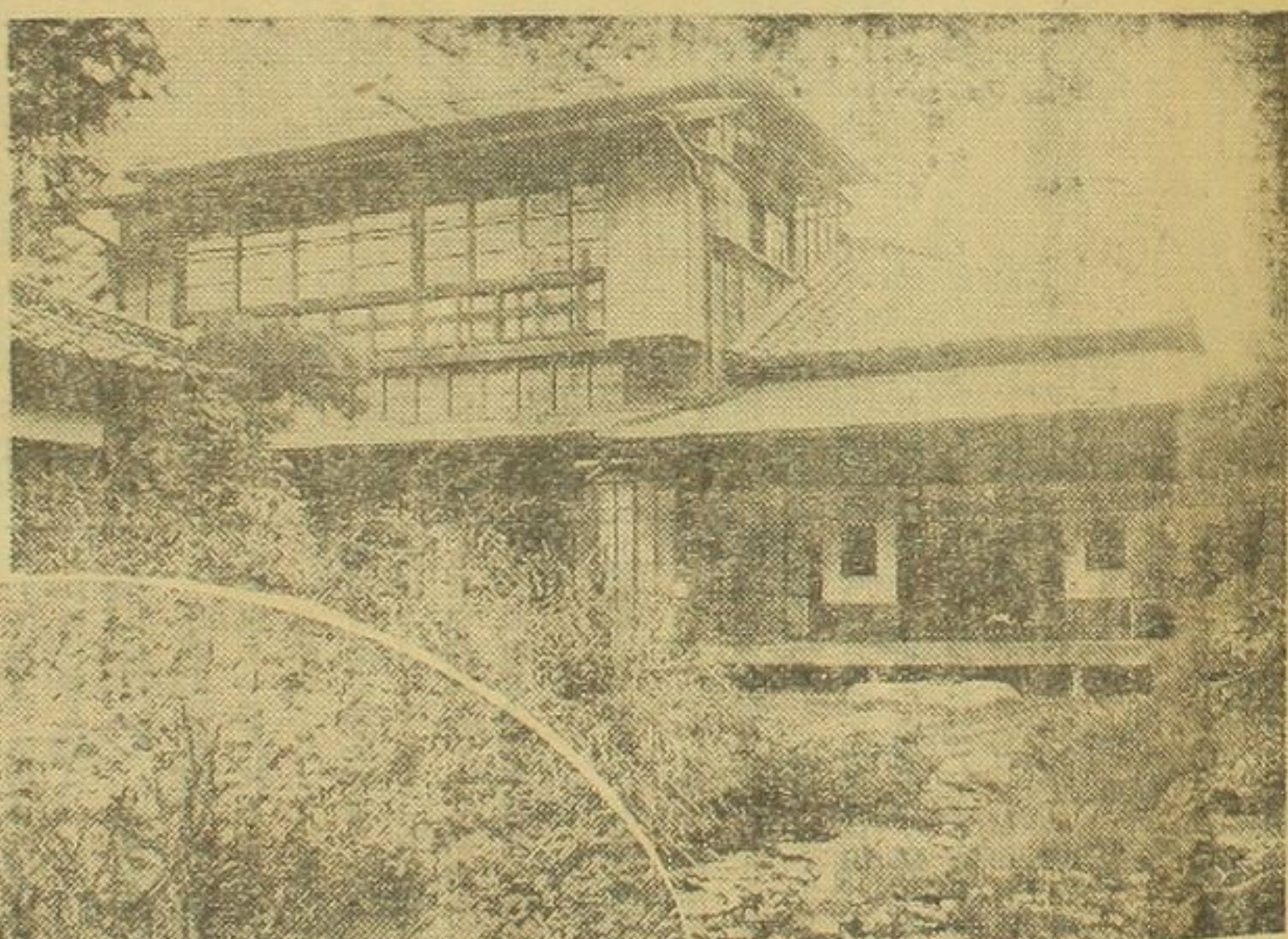
の筆を、別な筆で送るため
に、筆を出す事が出来なかつ
た。しかし毎日、見た事、聞
いた事、或は感じ、事々暇にま
かして書き送って置く習慣は依
然如例。一年立つてみると相当
に書き溜りを見てゐるのも相違
らずだ。

たま／＼廣井社長が見えられて
新聞社のために、筆を遊ばし
てくれないかとの話があつた。
が、新聞なんぞに書くやうな心
持でも毎日、書いて置いた
わけでもないから果して、役立
つやどうかに覺えない氣もした

自分は近年七八年續いて毎年夏季、暇
を得るにまかせ、むだ書きをする。そ
の結果、一年一回雑誌物を出版して世
に問ふ、それが年々の例になつてゐた
ところ、本年は少々、事情があつて夏
など、よく遊ばせるならば多
少は役立たせ得やう、とも考へ
て列卒に、一つやつてみようとい
ふ約束した。實は北越新報に對し
ては雑誌物、の縁因がないでも
ないからであつた。十年ばかり
前には二百回も續けて書いた事
があつたし、その他の場合にも
せつ／＼自分が出してゐる雑誌
物、の中にある多くのものが皆
北越新報に載せた、それを習
き直して探検し、關係もある。
そんなわけで、なんとかして一
つ筆を折つて折角いほる、廣井
社長の囑、に附いたとして古

く書いたもの、昨今書いたもの
それについて調べてみると、ほ
んど全く忘れてゐるやうなも
のが、少なくなく、それがまた
ボツ／＼と出て来る。中には難
助の情に堪へないやうなもの
がないでもない。二三十年前のも
のになると、他人の筆録を見る
の感のされるものもある。それ
を大事に繰つて行く事は如何に
も面倒で、時には筆を擱つて止
む事もあるが、書き送つてみ
れば、この前の時のやうに二百
回は續け得やう、とも思はれ
た。

この前二百回を續けた時は、十
べて趣味雑誌に限つたやうであ
つた。こんどは雑誌を廣く、趣
味、文藝、政治、或は社會
問題にとつたぐあいに多角性
を持たせて、見た事、聞いた事
感じた事を、書いてみやう
とも思つてゐる。中には雑誌を
讀んでそれを抜き書きしてゐる
ものもあつたし、或は本の事を要
略して書いたものなども、いくら



にもない。實は書き直さう、か
とも思つたが二百回餘をも續け
やうとするものを、毎日／＼書
き直して行く、自分にはそんな
暇を持たない。雑誌的に、書い
て置いたそれをそのまま出すよ
う他に、仕様がなく如何にも意
句の疎漫なのを厭う。が、こ
の點習者の習志を乞はねばなら
ぬ。(寫眞は、春城先生お宅面
接の間と應の植之込み)

かはある。何分古くから書いて
あるのでその事項、は二三百を
算しやう。そしてそれがまた何
本から抄録した、と書いてあつ
たり、なかつたりするので一々
署名を擧げる事の出来ないのを
遺憾とする。かつ文章の如きも
これとて世に公刊しやうとして
書いてあるのでなく、只自分だ
けにわかればよい、としての書
きつ振りであるので、潤飾もな

春城漫談

夕刊 北越新報

日六月二十

東京市本町二丁目
電話 二二七
社報新越北

No. 2



市島 春城

岡本保孝

岡本保孝は日本の歴史に名を留めなければならぬ人である。保孝は安積長房と共に昌平学校を創設した最後の儒者で、蔵書家をもつて聞かされた。どれほどの蔵書があつたか悉くは知らないが、三冊を借覧したいと思ふと多くは、岡本家へ出かけたもので岡本はその要求に聞き、深切に種々指導もして適當の本を貸し與へたことも惜ま

なかつた。と曾て石黒子爵から聞いた事がある。

保孝は考証家で待谷嶺南の遺蹟であつた。著書も少なくないが、ほとんど全部岩崎家の蔵書室文庫に蔵されてある。この人の大努力は平生の心血を盡して、康熈字典を徹頭徹尾、原書に溯り出典を校訂した事である。この人の大努力は平生の心血を盡して、康熈字典を徹頭徹尾、原書に溯り出典を校訂した事である。この人の大努力は平生の心血を盡して、康熈字典を徹頭徹尾、原書に溯り出典を校訂した事である。

愚亭

自分の身内を他に對していふ時愚亭兄弟と呼び、妻を愚妻と呼び、父母にまで愚を冠せしめるのは謙遜に出るとはいへず下へ過ぎて、自分分はこれを厭ふ。或は愚亭の愚亭に細君の志が果ると、己か其人を愚亭と呼ぶ事が行はれてゐる。見えて自分を誇かした事がある。

尖先生

支那では大先生、小先生、小先生と呼んでゐる。これもおかしく聞かせるが、さらにおかしいのは、先生と呼ぶ事がある事だ。これは表面は未だ津を通ぜざる處女十なはち小先生であるが、その實大先生を愛してゐるのをいふので尖先生と大小の合字であらう。

No. 3



市島 春城

池永道雲

池永道雲の家は日本橋筋の樂舗で、今もこの營業を持續してゐる。震災で一刀萬家の印が亡びた、と聞き惜しい事だと思つてゐるが本店には倉庫があつたため、それに入れて置いたものが却つて災に罹つた、と聞かされ痛惜の至をさらけ出す。そのうちにも惜しかつたのは一面の壁紙で、それには常信の繪があり、通符の和歌と餘もあり、道雲も愛玩の古器としてその家では特に大切にされたものであつた、がこれらも亡びた。但だ幸ひとすべきは道雲が苦心して著した蔵書、外に種々の著述の草稿が行李に入れ

向如來の佛像などを珍重したといふ。子孫に財産を遺つ遺言にも必ず佛像一軸を添へたといふから、かなり多く佛像を蔵してゐたこと見へる。

西郷の犬

東郷の高陵に建つてゐる、西郷南無殿大を曳くの銅像。日本の銅像の最も早き作であるが、その伴ふてゐる犬は日本種の大であるのは何人も、一見知るところである。然るに西郷の愛犬はセツターでそれは妙な來歴がある事を知れた。明治の初年西の公使館の書記官にバウルといふ人がゐた。この人は後に軍記官を辭めて、横濱で輸入のアゼントをやり終りに日本に歸した人である。が、その在官中日本の大官に交つた中で特に西郷と親しみ、西郷が郷國歸國に歸り十年の戦争となる前にバウルと別れ、時、自分は死に行くと、暗に戦争の事を告げたほどの感涙の關係があつて、バウルも委曲に辨じ兼ねながら何か、常ならぬ大事のある事を豫想して切

金玉均翠丸

入澤達吉博士と同遊した時に翠丸の話が出た。左右翠丸に多少大小があるやうだ、がといふと入澤博士は、諸説を弄して朝鮮人だけは左右ともに大小がない。鮮人に金玉均といふ人があつたといふので、といふて笑はせたものだ。

寄附催宣

兎首看時室載

No. 5

刊夕

北越新報

日九月二十

郡吉留彦佐 師人馬行寄
目丁二町上之坂市海長
社報新越北



春城漫談

市島春城

てあるものはない。
日本の事は誰も知らなく顔に現
支那の産品となつてゐる燕巢は、
日本人にまで賞讃を贈らないものだ
が、支那ではこれを茶冠といふ第一
に置かれてゐる。その名が燕の巢とい
ふところからこれほど、日本で誤解し
ゝ作らるゝ、其材料は燕の糞で來
る泥土で、それに糞を交へるから

まことに汚穢のもので、どうして
あんなものが食料になるかと不審
に思はれやうが、食料にする燕巢
は全く異なるものである。第一燕
が全く違ふ。糞を作る場所も違ひ
菓の材料も全然異なる。燕巢の燕
は南洋羣島に住んでゐる鳥で、普
通燕と呼ばれ、離島、里の燕よ
りは大きく、鳥に似たやうなもの
である。それがどこに糞を作るか
といふに人家近くではなく、海邊
の懸崖絶壁で、人の近づき得ない
洞穴を相してそこに糞を蓄むので
ある。その材料は海草や、魚類を
嚼み碎いてそれを組み合はせたま

のたといはれてゐる。一皿がこ
れを口に入れて沫沫を吐き出して
出すといふが、そこに化学作用で
も起るものか、日本人のやうな潔
癖のものが聞くと厭な感じが起る
けれど、燕としては大切な食料
で、或季節の糧に備へやうとして
の巣である。里の燕の巣の如く子
を産んだり、それを育てたりする
巣とは全然違ふもので、鳥の糞食
を人間が奪つて喰ふのだ。
この巣、赤、黒、白の三種あつて
赤色のものが最も珍とされ随つて
價も甚だ高い。何分にも人の近づ
き難い懸崖にあるのだから採集
が甚だ困難である。日本の採集家
が矮小にして自然の木の相をな
してゐる様相を、非常の危険を冒
して採取するのによく似てゐる。
も、この懸崖を掛けたら、いろ／＼
の雨脚な工風をし、採つたもので
あるが、だん／＼狡猾な工風をな
し糞を使つて探らせるとも聞いた

小松喜平治

京都府選出の代議士で小松喜平治
君といふのがあつた。君は曾て
自分らと共に議席に就き、同人中
の酒豪として名があつたものだ。
このころからいつて面白事を
聞いた。かれが議員で押増増徴案
の價があるやうな。

No. 4

刊夕

北越新報

日八月二十

郡吉留彦佐 師人馬行寄
目丁二町上之坂市海長
社報新越北

春城漫談

市島春城

術をだといふ事である。その家
船に傳はる船圖一卷には種々の船
が描かれてゐる。船中の川を
経て湖の湖に至る程度のもので
皆な小船である。將軍坐乗の船は
さすがに立派で、舟の頭を見ても
將軍の威光を見ても



用である事は申すまでもなからう
外に料理船といふのがあつた。膳部
を並べたものであるのはいふまで
もない。
船頭を飾した一膳は約二十膳の歌
が歌はれてあつた。これにもさすが
に野卑な文句はない。秋花、八重
菊、夏の夜などいろいろの歌が見
へた。秋花の歌の目頭に「ヤンレ
秋花の夕まぐれこそたならぬ
とあつて、雅趣のあるものだつた
當時は宴席などに歌はれ、唄は
じ、唄は合はし曲を唄ふ如く、今
は随分薄山あつたものらしい。今
はその節を知つてゐるものはト
ンといふ事だ。將軍がこの船
に乗つて兩國橋を通過する時な
どは橋上、人の通行を禁じてのみ

ならず岸の人家の戸を閉ざしめ
二階から、見下すを許さなかつ
たといふ。この船方は江戸に六組
あつて水上警察の任務、をも執ら
せまた流罪人をも取扱い、八丈島
へ流罪の囚などもこの船方が伴は
つたものだといはれてゐる。
座敷八景
肥後守の兄の真柳は名高い狂歌人
であるが、その人會て火事に遇ふ
て土蔵住居を失つた折の狂歌に
くら住居江戸を移して朝夕の烟
りをふじと詠めくらしつ
生れたる時こそ聞なれば
やがて死んときらに入
定家とは似てもつかぬ小倉住
百人一首あるかゝりだ
せもうも我住宅は都ぞやた
みの數も九疊まである
この真柳にまた座敷八景の歌が
ある。歌はともかくも入景の見立
がよろしい。
鎮家秋月、厚子晴嵐、時計庵鐘
葉子夜雨、澄浦雪、琴柱落雁
行燈夕照、竹架露帆
童子にけ笠を借くが故に夜雨も利

に反對し、時、明治大帝には位從
のものに、與太郎のまゝ反對した
な、と仰せられた。侍従は與太郎
の何ものたるを伺ふて始めてその
小松、なる事を知つたといふ事だ
ある。小松は中山邸の附近に付
てゐる某族の子息で、大帝の御坊
少で中山邸に在した時、小松君も
しばしば参候した。時、大帝と
年であるので時には相違の御手
などをもちした事がある。大帝は
んな關係より小松君の事を御座
ありて、曾ては御召の厚着園を賜
はつた事もある。小松君は天皇の
辱なさに感泣しつゝこれを、用ふ
るは勿体ないと悲しく床の間
つて置いたと聞いた。皇后様もか
くと聞召して御菓子賜はつた
事がある。また大帝から小松君の
酒好きなる事を知り召して御酒を賜
はつた事もある。小松君は昔
氣の酔ふのは御許の御酒ひだとい

座敷八景
肥後守の兄の真柳は名高い狂歌人
であるが、その人會て火事に遇ふ
て土蔵住居を失つた折の狂歌に
くら住居江戸を移して朝夕の烟
りをふじと詠めくらしつ
生れたる時こそ聞なれば
やがて死んときらに入
定家とは似てもつかぬ小倉住
百人一首あるかゝりだ
せもうも我住宅は都ぞやた
みの數も九疊まである
この真柳にまた座敷八景の歌が
ある。歌はともかくも入景の見立
がよろしい。
鎮家秋月、厚子晴嵐、時計庵鐘
葉子夜雨、澄浦雪、琴柱落雁
行燈夕照、竹架露帆
童子にけ笠を借くが故に夜雨も利

嵐雪梅

服部石氏の説のうちに、佛人嵐
雪が平野木あたりの某寺にあ
つたのを、前年他へ移した。その
墓所に古梅が、採あつて元祿あた
りの古るびがあつた。本殿は遷移
したが、鏡らに出た芽生が直徑五
寸もあつてこれも、上ほどの年數
を標してゐる。墓に移すについてそ
の梅を取拂ふ事になつたので、そ
の材を印材を作り、「嵐雪梅」の格
印を材に採して佛人のために一時
多くの印を彫つた、事があるとい
ふを聞き自分も一類の類を依
た。それは友人井上蘭水氏が佛語を
やるからそれに、贈らんがため
あつた。嵐雪の子孫は今遺跡にあ
つた。只、子孫は今遺跡にあ
つて葉茶を漬いてゐる。その漬く
茶は嵐雪といふ説もある。そ
れがま、番茶であるといふのがさ
らに面白い。

寄園雜誌

朋紳雜誌室藏

北越新報

日十月二十
郡吉留藤佐
日丁二町上之市島春城
社報新報北

No. 6

春城漫談

市島春城



新年熱海へ行く汽車中徒然に嘆へず。櫻子の銀座へ贈る書を讀す。中大島實水といふ人の書いた廿五年頃の讀賣新聞といふ項にフト自分の名が見ゆるから何が書いてある、と讀んでみると自分の月給や、賞與金の事が社の記録によつて記されてある。自分は既に忘れてゐるが事實

た、社員賞與録なる記録、があるが當時は物價も安くはあつたが、それで見ると其時の主筆は市島藤吉氏で、月給が金八十圓賞與金五十圓とある。しかも上欄に「改革の實際力に付」といふ朱書があるところから見ると、それも特別に氣使つたものと見える。(但感じの好い様に約東は年俸として極めたらしく、年俸一金九百六十圓、月給金八十圓とはしてある。)主筆にして如此。其以下の者の月給と云つたら今から見れば實に滑稽の様に思はれる。今代藤吉氏として市を利かしてゐる四半銀吉氏

でも、此時は編輯長位の地位でありながら月給が廿七圓。(これも年俸一金三百二十四圓、月給金二十七圓といふ事である)賞與金が十五圓である。これにも上欄に「九圓の處主筆不在中盡力に付」といふ朱書がしてある。藤吉氏としては當時第一人物と云はれてゐた藤山(誠之)氏でさへも、年俸百八十圓としてゐるから月給にすれば金十五圓廿五圓、賞與は四圓半に過ぎない。藤吉氏の地位はこれであつた。藤吉氏の地位はこれであつた。藤吉氏の地位はこれであつた。

山陽の扇面

頼山陽が竹田の俗歌を扇面の裏表に書いた、ものを寫らして買はぬかと勧めに來たものがある。なかなか讀み難いので苦心してやつた。讀んだが、一二ヶ所まだ讀み兼ね

るところがあるけれども、大体は次の如くである。おきこたつ、ほれたと云へば、いやじやと云へば、どうやら、小つまの水滸黄。したでもなし、せんでもない。ゆうべ結んだいと重帯、長い誤謬はマア書いてこれこそよきがある。マアあがれ、さかがある。さ、一ツ、氣の合ふた同志。寄合つて、火鉢の(一字不明)しやうじや、こらへてはなして、さつと突ふて、あとは何にも、おきこたつ。突来冬月(二字不明)。藤吉會於河東一樓、聯歌妓飛騨座有竹田先生、用其語作此、他日藤吉必有讀而唱之者、余雖不與其會愛而錄之。やまのなやみ

北越新報

日一十月二十
郡吉留藤佐
日丁二町上之市島春城
社報新報北

春城漫談

市島春城



江金之君、著した酒の書は通説の酒の一たる酒に較べれば優る事一等である。近時、好酒家の逸事などを書き交ぜたものも悪くはないが、何故國語と酒、若しくは政治と酒といふ如き、あるに相違なく、符合二酒を飲んだら、政治を説いたり、政治の妥協をやつたりするはよろしくないとこ

務は本来關連を許さない筈である。藤山前後の國を負つての志士などは、けふあつて明日あるかたきやの危険の増進に立つて奔走したものが、酒なくして如何でその體面を遣り得たであらうか。事を行ふに先だち同志と飲み管す杯は、眞に認別の酒であつたらう。事成つて祝する酒がたしひ骨格や、華街において酌みかはしたとしてもそれはすこぶる實義ある酒、であつた。酒を介して肝膽相照した事もある。酒あるが故に乖離を理めた場合もある。酒あるが故に同志を結合した事もある。酒を藉いては強運の合従連衡、も酒を藉いて

りて出來たともいへ得るであらう。藤山前後の歴史は酒臭い歴史であつて、酒臭い歴史が決して少なくない。血生臭い歴史だと思ふのは一面のみを見る偏見である。品川彌次郎氏が作つたといはる、あの命の酒を知らぬか、トコトヤレ酒は意軍を討滅するに力あつた行進曲だが、あれなども京都の鼓樓で酒の餘りに出來たものと

酒の功位といはざるを得ぬ。木戸や、西郷やその他京都に流れた酒も、情話も今尚鮮やかに存在してゐる。當時の飲酒家などいふものは皆酒を藉りて飲酒の氣を吐いたものである。酒がなければ唯の人であつたともいへる。藤山彌吉が東宮の師傅として時御前

中將姫

貴高貴の家庭に中將姫といふ女性が生まれて、さながら人間的な佛のやうだといはれ、その事蹟を記して珍重した。その事蹟を記して珍重した。その事蹟を記して珍重した。その事蹟を記して珍重した。

寄園雜草

脚紳春請室藏



日十月二十

東京市本町二丁目
電話二二二二
社報新報

島春城

銀座
海へ行く汽車中徒然に響へす。
の銀座へ入るる書を讀す。中
島春城といふ人の書いた廿五年頃
の新聞といふ項にフツ自分の名
へるから何が書いてある、と讀ん
に相違ない。

左「社員賞與録」なる記録、があ
るが當時は物價も安くはあつた
が、それで見ると其時の主筆は
島春城吉氏で、月給が金八十圓
賞與金五十圓とある。しかも上
欄に「改革の原動力に付」とい
ふ朱書があるところから見ると
それでも特別に氣遣つたものと
見える。(但感じの好い欄に約
束は年俸として極めたらしく、
東は年俸一萬九千六百圓——月給金
八十圓とはしてある。)主筆に
して如此。其以下の者の月給と
云つたら今から見れば實に滑稽
の極に思はれる。今代議士とし
て申を利かしてある西中島吉氏

でも、此時は編輯長位の地位で
ありながら月給が廿七圓。(こ
れも年俸一萬三千二百四圓、月
給金一十七圓と書いてある
が)賞與金が十五圓である。こ
れにも上欄に「九圓の地主筆不
在中職力に付」と但書がして
ある。驚くべきことは當時第
一人者と云はれてゐた堀紫山
(誠之氏)で、年俸百八十
三圓としてあるから月給にすれ
ば金十五圓廿五圓、賞與は四圓
廿圓だ。編輯家の權威だと云は
れてゐた手兵橋氏(鈴木實之進)
も、年俸金百廿圓、月給金
十圓、賞與金七圓と書いてある
更に面白いのは、明治文壇の泰
斗紅葉山人尾崎士郎氏、の月
給が金四十圓の事と、紅葉氏が
(宅で苦心してゐる事などは
かからない)と見て、破々社に頭
も出さない、ので、社長の前
に「此書(破々)と上欄に書
讀んだが、一二ヶ所まだ讀み兼ね

この筆者は知らざる人だが讀
關係のある人に見える。讀買は當
時俸給が安いといはれた社であつ
た。自分が主筆になる前多くの文
藝家が去つて、他社へ赴いたの
他社では倍額位な俸給をもつて
へたからである。紅葉はさすがに
俸給の多寡をもつて進退はせな
だ。

この扇面終に藤が架中に置く。
やまのなやみ
雖不與其合愛而錄之
他日旗亭必有讀而唱之者、余
於河東一樓、聊歌妓飛羅舞歌
座有竹田先生、用其語作此、
癸未冬月(二字不讀)諸子會
とは何にも、おきこたつ。
とほなして、さつと笑ふて、あ
てくれと、よりかより、ちよつ
と重畳、長い論議はマア書いて
これこそかよりがある。マアあ
がれ、さがある。さ、さ、さ、
氣の合ふた同志。密合つて陸と
陸と、こふすり合はせ、火鉢の
(一字不明)しやうじや、こらへ
てくれと、よりかより、ちよつ
とは何にも、おきこたつ。
癸未冬月(二字不讀)諸子會

山陽の扇面
頼山陽が竹田の俗歌を扇面の裏表
に書いた、來たものがある。なか
か讀み難いので苦心してやつと
讀んだが、一二ヶ所まだ讀み兼ね
るところがあるけれども、大体は
次の如くである。
おきこたつ、任れたと云へば、
べつたり、あつひあつうごさる
いやじやと云へば、どうやら、
小つまの水淺黄。したでもなし
せんでもない。ゆうべ結んだ一
と重畳、長い論議はマア書いて
これこそかよりがある。マアあ
がれ、さがある。さ、さ、さ、
氣の合ふた同志。密合つて陸と
陸と、こふすり合はせ、火鉢の
(一字不明)しやうじや、こらへ
てくれと、よりかより、ちよつ
とは何にも、おきこたつ。
癸未冬月(二字不讀)諸子會

北越新報

日一十月二十

東京市本町二丁目
電話二二二二
社報新報



市島春城

春城漫談
住江金の君り著はした酒の一冊は通説
酒の一たる酒通に較べれば層層第一等
である。近時、好酒家の逸事などを書
き交ぜたもの悪くはないが、何故國務
と酒、若しくは政治と酒といふ如き好
あるに相違なく、符合二酒を飲ん
で政治を説いたり、政治の空協を
やつたりするはよろしくないとい
れを推して、酒と政治や、酒と職

稱は本來國運を許さない種である
などいふのは、野暮の骨頂だ。
維新前後の國を負ふての志士など
は、けふあつて明日あるかたきや
の危険の増進に立つて奔走したも
のが、酒なくして如何でその體操
を遣り得たであらうか。事を行ふ
に先だち同志と飲み替す杯は、眞
に認別の酒であつたらう。事成つ
て祝する酒がたよひ香煙や、華街
において酌みかはしたとしてもそ
れはさぶる意氣ある酒、であつ
た。酒を介して附離相照した事も
あらう。酒あるが故に飛離を理め
た場合もあらう。酒あるが故に同
志を結合した事もあらう。大きく
いへば強運の合從連衡、と酒を藉

りて出来たともいへ得るであらう
頼山陽の歴史は酒臭い歴史であ
つて傳ふべき逸事が決して少なく
ない。血生臭い歴史だと思ふのは
一面のみを見る偏見である。品川
彌太郎氏が作つたといはるよしの
爺の御説を知らなかつたか、トコ
ヤレ爺は軍を討つるに力があ
つた行進曲だが、あれなども京都
の妓樓で酒の餘りに出来たものと
思へば、酒臭い歌である。前島勇
蔵が龍川氏のために明治政府の役
人に取入らんと苦心して、その役
人が花魁を擁して馳せて来たこと
へ自ら杯盤を持ちこんで、騒味に
つけこみ頭目的を達したなども
酒の功位といはざるを得ぬ。木戸
や、西郷やその他京都に流連した
遺蹟も、情話も今尚鮮やかに存在
してゐる。當時の賦性家などいふ
ものは皆酒を藉りて賦性したも
の吐いたものである。酒がなければ
唯の人であつたともいへる。杉浦
忠彦が東宮の師傳りし時御前
で酔へば、必ず才氣非龍の縁に

酒の土佐、と
いふものを書いてみたいと思つて
あるやうな次第だ。酒の餘は國を
亡ぼす事もあるがまた國を興す事
もある。維新の革命を成就するに
は酒がどの位手傳つてゐたらう
か。畏れ多い事であるが維新の酒
業を大成せられた不世出の英主
明治大帝、もまた酒を嗜ませら
るゝ方であつた事を最後に書いて
置く酒といふ著者に、最も光輝あ
る維新の酒を逸するなどは能を盡
して眼時を點じないと同じではあ
るまいか。

中將姫
昔高貴の家庭に中將姫といふ立派
な女性が生れて、さながら人間化
した佛のやうだといはれ、その事
蹟が支那にまで傳はり、支那では
その事蹟を聽して珍重した事があ
つた。その體は日本の好める家に
製された事が二度ある位だ。が支
那人はそれとどんな誤謬を録して
あるか、といふとこんな女性があ
つた。

那に現はれず海を闊へて歸邦に
現はれたのは、誠に淋しいといふ
のである。これは傳説でなく事實で
あるが、傳説として妙な事傳へ
られてゐるのは頼山陽の神が唐の大
宗の時に揚貴姫となつて支那を色
仕掛で探察し、李白をしてこれ色
君主早く朝せず、と歌はしめた。
支那は日本を侵略する意があつた
のを、この女で喰ひ留めたといふ
て頼山陽の神話内に揚貴姫の體を
祀つてゐるが、聖賢支那が方士揚
貴姫をして支那島なる日本にその
魂を授けさせたといふ話から
日本の傳説になつたのであらう。
が、頼山陽の神話が貴姫となつて唐
の天子を歌化して國難を救つたと
傳ふる事は傳説中餘り頼りない事
である。この傳説を支那人に評す
せる中將姫と對してなんと評す
るであらうか。名古屋に美人の多
いのは貴姫の體化であるなど、故
事附けるものもあつて可笑しい。

寄附録

朋紳羣議室藏

東京市本町二丁目

電話二二二二

社報新報

北越新報

日二十月二十

編輯人 市島春城
發行所 北越新聞社
社址 北越市上町二丁目

No. 8

春城漫談

市島春城

翁反故



前年予が多く古簡を蒐集した折書紙について、その意味、その趣をいろいろ書いてきた事があったがその際、翁の附かなかつたのは芭蕉に翁反故、の書があった事だ。これには翁の遺稿が三百通から取らぬ。毎に庵の天井に貼る、即ち翁の遺作を拾ふにも役立つ。相違ない。この書は翁の門人、加賀の梅石に寄せてのもの、梅石はその散逸を惜んで形骸の到り

花に持ち帰り、晩年芭蕉翁三世大蔵にそれ譲った。すると大蔵は感ずるところあり世に翁を慕ふもの多し、一人にてこれを私せんとして、己が手にしたる翁を譲りて世に感ずる各方面の人々に譲へた。但文と附帯の句を収録してその各々につき行く先きをも注した。この一冊の書は下はちそれを梓に上りて天明年、江戸の野村翁に譲りて、翁反故中破損して役立ざるものを一括して日暮里青雲寺の後山につつめ碑を建ててその事由を記し、その碑を芭蕉翁反故家といふ事もこの書中に詳記されてある。

北越新報

日三十月二十

編輯人 市島春城
發行所 北越新聞社
社址 北越市上町二丁目

No. 9

春城漫談

市島春城

貧民窟



秘蔵品は別天地でその研究者から話を聞くのも一興である。社員の堀田草間八十雄氏といふ人はこの方面の探検家で、今ではこの人がこの界の第一人者であらう。全体貧民窟の研究は明治卅年であるが餘り行届いたものでは無い。草間氏はこの研究に二十年位費し随分苦勞してゐる。只氣まゝに面白半分は貧民窟の實情

を調べてゐるのでなく、裏れたこの方面の人間を救ふたり、窮乏を明らみへ出すために百里の遠きまで遠征して、種々の窮乏なところもあつた。古賀精里に附帯の調査法があつた時などは遺族の所在が知れず、この人がその遺族を探しやつと茶溪の孫に當るものを探し當て、それは秘蔵品をしてきて古賀精といふものであつたが、昔には兄があつてそれが早く失踪して、どこにあるかわからなかつたのを偶然の事から食の内に古賀精といふのを探し出し、それを酒の家に納めたが不幸にして清の間もなく死んだので、また亦

予は秘蔵品のため、といふを秘蔵に書いてあるがこの遺稿は好んで選んでからさるもの。秘蔵品に秘蔵品が終りに心附かなかつたのは遺稿であつた。芭蕉翁の書に今に傳はるものは少くない。その寫を寄せ集めて上木したものもないではない。がその一人に寄せてある芭蕉の三百通に及ぶものはおそらく、この外にはあるまい。もつとも梅石に寄せたのは昔年短冊で二三行乃至四五行、ものが多くすべて常用を辨するまで、今この遺稿の文の如きものだ。必竟翁は梅石の庇護の下に朝夕を送り、梅石の家が近くにあつたため口上代りに筆を託したものと知らる。さすればその遺稿は、世に傳はる長冊をもつて比すべきではないが、翁の日常生活に即てこれ等の遺稿により赤裸々、に現はれる事は、秘蔵品の生活を見れば材料とす事が出来る。多くの書物は梅石より寄せられた物、秘蔵品は梅石などにて、或は食物、或は衣服を贈られたるを辨し、或は門松を

孫文の墓

かれない、と聞いては濟生會も秘蔵品には役立つ立派な知つた。この頃支那で孫文の墓を見、また露西亞でレンンの墓を見た人の話を聞くに、何れも宏壯のもので孫文の墓は大石で作られ前面に金庫の扉の如き戸があつて、それから棺を入れるやうになつてゐる。友那では墓を發く風もあるのだから、防くために周到の用意があり、歴朝天子の陵に類しないほどのもので、土饅頭のところを全部大理石たといふ。レンンの墓は地中にガラス製の大きな棺が安置されて外部より中が見えるやうになつてゐる。レンンの遺體は棺の中に置かれて、棺がら生けるが如く腐蝕は多少紅味を帯びてゐるやうに見へた。聞いたが、いくも共産主義でも、デモクラチックでも墓だけは持つてゐる。崇拜のす業である事はいふまでもない。

春城漫談

玩具小品



玩具小品 子供が小樽中の名物といはれたものは...

あつて時代の有無にかまはらず 頭是なき小児の遊具に供するは...

夕刊 北越新聞

春城漫談



市島城春

花魁吟味

明治廿二年江左衛門氏の出版にか...

用儀にふり出候はよ各々宿より...

玩具小品

市島春城

もあつて時代の有無にかはらず
頭はなき小児の遊具に供するは惜
しく、いろ／＼に見立てて大人の
用となるものもある。

根付などいふものは粗通しの穴が
必ず穿つてあつて、巾着印刷な
どに附屬する用のものでその際
貌が玩具、砂でも、それは玩
具にあらずとハッキリ區別もつく
が根付に似て細通しがなく、或は
器のつめ或は机上の小置物とい
はれてゐるものがあるが、
それ等は玩具と、どこに相違があ
るか。貴族階級に弄ばる、精巧の
玩具のうちにこのやうのものも
甚だ多のである。私が曾て實用
的フランクシヨンのあるものだけ
状が玩具をつくりでもそれは玩具
の用材たるために作された

でないといふ事がある。例へば
ラジオ機、飛行機に形どつた鉛筆
削りや、犬や猫の顔の墨汁壺や發
火器などはそれ／＼實用のフアン
タシヨンがあるから玩具でないとい
ふたがこれも甚だ覺えない區別
である。小児のために作つた玩具
でも實用を離れたものゝみではな
い。例へば誰れでも立派に文字が
曲でも源氏なども立派に文字が
刻されてゐて、實用に足る事にな
つてゐるし、鉛筆小刀などは物
を切る事の出来るやうに刃がつけ
てあるし、花生などは一輪生に役
立つといふやうに實用能力のある
ものが少なくないから一概に、玩
具は實用のものでないといへぬ。

玩具は小児用のものゝみと心得る
のが間違で、大人用のものもある
のである。人間は幼少の時早く玩
具の趣味に養はれ、長じてもそれ
を喜ぶ興味があるので工師が種
種のものを作つて實用に供する
にも、多くの場合玩具趣味がつき
纏つてゐる事は争はれない。印の
紐でも香爐のツツミでも、交際具
のさま／＼の工師でも、崇敬を拂
ふ神佛の像でも皆な玩具趣味を有
しそれが遊玩の中興となつてゐる
のは、玩具に愛すべき素質がある
からの事で、毅然たる區別を玩具
と非玩具、間に立てる事は甚だ
困難である。吾小精蘆中の多数の
小品はその困難を説明するに餘り
あり興に際してこの記を作ら
(昭和五年三月五日)



日五十月二十
編輯行發
社報新報北
目丁二町上之坂市西長
社報新報北

子昨年吉原三浦樓の當座日記一冊
を得てその三浦樓の事を取調べた
るに、高尾の因縁ある家ではな
くて小田なる事を知り得た。また
この店を經營したるものは、
家系の消息なる事を知り得
たのである。さてこの日記は三浦
樓内証の書籍にて種々の事を書し
ある中に、吹上のお呼び出し
の事を書してゐる。それは何故の
事を出したのかその仔細は書いてな
いが呼出されたのは、櫻屋大右衛門
相模の遊女六七人で三浦樓の娼妓
は與らない。予はこれを讀んで何
故の吹上かを解し得ず吹上へ召喚
するなどは妙な事と思ひたるが
この論議によつて、初めてかかる

用儀にふり出候は、各々宿より
竹橋御門より差向候所つめり
申候は、右侍人共儀御門外に待
候事。御門外より西
の方吹上御掛外に御門外に罷在
候事。

十九人
御吹上門、御籠夫より御門内左
に小家二軒一ヶ所遊女小家右に
て九ツ頭櫻屋大右衛門様にて遊
女三、御吹上八、時頃にて遊
女三、遊女五人御吹上し尤手引
一人のみ、御吹上不相成尤病氣作に
申抱方として、髪結うら、漆一丁程
行吹上御吹上へは、當人一人
(このところ讀めず)上草履なら
ず

記事中讀み穿ぬるところあれども
大略は右の如くだ。前に三浦樓興
らざるやう書きたれども店大數と
あるの記事は三浦樓の遊女史料が
取り調を受けた後の記事と思は
れる。この櫻に更科といふ遊女あ
る事日記に見えてゐる。これによ
れば代人も許され髪結ま、仲ひ、
當當を給されほとんと出廷の御夜
は不慮にて用意した事からか、は
れる。尚吹上お呼び出しせある
下に書きたる人名はあとの四、右
衛門人數とある人名と異なること
ろがあり、先きの「豫定にて後の
が實地なり」と知らる。

城春

魁吟味

江川八左衛門氏の出版にか
の花七編と題する三浦樓三
將軍吹上において公事
る。花魁二人、一人は遊
人は立つて来たに就か
は、櫻屋家御家例の一し
奉行立會にて吟味の模様、
の風俗舉動を知らしめし給
御とかや。故に勉めて櫻屋
て清麗なるを上聴になすと
この事を知る人世に稀也
櫻屋家透見し給ふさまを畫

していさゝか説明を附す。遊樂
家主人敬白。
予昨年吉原三浦樓の當座日記一冊
を得てその三浦樓の事を取調べた
るに、高尾の因縁ある家ではな
くて小田なる事を知り得た。また
この店を經營したるものは、
家系の消息なる事を知り得
たのである。さてこの日記は三浦
樓内証の書籍にて種々の事を書し
ある中に、吹上のお呼び出し
の事を書してゐる。それは何故の
事を出したのかその仔細は書いてな
いが呼出されたのは、櫻屋大右衛門
相模の遊女六七人で三浦樓の娼妓
は與らない。予はこれを讀んで何
故の吹上かを解し得ず吹上へ召喚
するなどは妙な事と思ひたるが
この論議によつて、初めてかかる

五人組持地借
四郎左衛門御
遊女 更科
召仕 まき
四郎左衛門願に付
五人組 文藏
同 新八
名主 おらく
髪結

明後十二日於吹上御吹上之事
一御遊所病之儀に付、遊女相儀物
靜可仕候事
一換取にても、櫻中致可能
出尤、當座御手當下、飯別
段用意者不及候事
一若雨天に候は、雨から傘等相

物持二人(吉五郎、不審番)

夕刊 北越新報

日六十月二十
編輯 佐藤 隆
印刷 北越新聞社
發行所 北越新聞社
社長 岡田 隆
副社長 北越新聞社
〒100 東京都千代田区

No. 12

市島春城

山と酒



春城漫談

山と酒が関係がないでもない。遊山酒といふ言葉さへある。昔は山遊びに酒を扱へた。遊山は酒を飲むのが一つの目的であつた。もち論酒を飲む遊山は高山に攀ぢるのではない。八里を僅に越れた高くない山での事である。命を賭するほどの峻険を僅かにビツケルを頼つて攀ぢる時に酒などは問題でない。しかしながら酒客は決して酒を忘れるものでない。能ふ限りは必ず酒を携帯する。それはワキスキなどの小皿で酔通の酒である。信州あたりでは普通の樽は櫛く不便であるところ

から阿扁の樽、東屋の田舎で不淨物をとる樽の式であるものを用ゐてゐる。いく日も山路を踏まねばならぬところではキャンパの中でこれを飲んで快をとる體言がないでもないが、かゝる酒客の再いた登山記を讀んでみると折角大切に讀した酒が、何時の間にか失せて仕舞つて失望を來す事が少くない。難儀な登攀には全酒を忘れてゐるがイザ安心となつて初めて酒を思ふ。そのときには酒が残つてあるはずでも案内者は何時しか飲み盡して樽を擲かして見ても一滴もないのが常である。眞は山には酒は非常に貴重のもので高山などに小屋があつても、それに備はつてある筋のものではない。それどころか山を下つても僻地の村などでは酒を求めて得られない事が多い。酒客が攀山に成功してその歸路を杯をときりに酒を求め

ても、山間の人家に得難いのに舟楫を起すやうな記事は登山者の日記によくある事だ。自分は壯年の頃登山の趣味があつたがその頃は、まだ日本アルプスなどを誰も征服志ざすものがなかつた。自分は僅に富士や、淺間や、御嶽その他五六の山を跋渉したに過ぎないが、自分は酒客でも酒を擲へる事はしなかつた。その頃はまだワキスキのやうな簡便のものもなかつたし、一日で登つて一日で降り得るやうな山に強へて酒を擲へるにも及ばなかつた。むしろ終日勞して下山の後酒を親しみたいとそれを樂みにしたのである。然るに富士登山の際意外の烈風に遭つて絶頂まで達する事が出来ず、七合目の露窟に一夜を送らねばならぬ事になつたので、ここに端なく酒を親しむ事になつた。同じところに泊り合はせれば、隣人の海軍士官が、合力に命じて食料と共に二升の焼酎と食糧から取り寄せたので、士官のなすにまかせて焼酎を燗して熱酒を五合ばかりも飲んだ。その頃の富士は今よりもやうに便利になつたがしかし登山食糧には焼酎にせよ、酒があつたのである。自分は元來焼酎を好ま

す、かつ燒酎を嚙にして飲む事が初めてであるので、内心酔を恐れ初めは恐る／＼飲んだが山中の氣温は非常に低いので、いくら飲んで一向に酔を發しないのはさうに驚いた。酒は酔を買ふためであるのかくは興味がなかつたか、もしこれが寒地でなかつたらどんなに酔ふた事かその時既に思ひ遣つた。實際ひどい寒地では焼酎を飲んで平氣なものである。駿中乗合馬車で信州の追分を通る時ブランド一本ラツパ飲んでしきりに酔つて僅かの間に平けたが、この時も酔を發しなかつた。これ等の経験からすると高山に酒を擲へるなどは無駄ともいへるであらうともすると山中に飲んだ酒は山を下ると速に酔を發し、往々歩行も出来ない事もあるから危険がないでもない。自分の或る経験によつて最後の黒岩の飛瀑に對し、石に踏して傾けた酒がその邊に落ちては少しも酔を發せず、僅にそこを離ると忽ち一時に發して困つた事がある。しかし山を登るの成功は兵では勇健と同じである。酒客の酒を思ふ當然過ぎるほど當然で、お情を察し得ない。(昭和五年七月廿七日附後録)

書園藤草

題前書請室藏

徳川公
天
山
酒
山と酒が関係がないでもない。遊山酒といふ言葉さへある。昔は山遊びに酒を扱へた。遊山は酒を飲むのが一つの目的であつた。もち論酒を飲む遊山は高山に攀ぢるのではない。八里を僅に越れた高くない山での事である。命を賭するほどの峻険を僅かにビツケルを頼つて攀ぢる時に酒などは問題でない。しかしながら酒客は決して酒を忘れるものでない。能ふ限りは必ず酒を携帯する。それはワキスキなどの小皿で酔通の酒である。信州あたりでは普通の樽は櫛く不便であるところから阿扁の樽、東屋の田舎で不淨物をとる樽の式であるものを用ゐてゐる。いく日も山路を踏まねばならぬところではキャンパの中でこれを飲んで快をとる體言がないでもないが、かゝる酒客の再いた登山記を讀んでみると折角大切に讀した酒が、何時の間にか失せて仕舞つて失望を來す事が少くない。難儀な登攀には全酒を忘れてゐるがイザ安心となつて初めて酒を思ふ。そのときには酒が残つてあるはずでも案内者は何時しか飲み盡して樽を擲かして見ても一滴もないのが常である。眞は山には酒は非常に貴重のもので高山などに小屋があつても、それに備はつてある筋のものではない。それどころか山を下つても僻地の村などでは酒を求めて得られない事が多い。酒客が攀山に成功してその歸路を杯をときりに酒を求め

書園藤草

題前書請室藏

No. 15

北越新報

日九十月二十

行發 市島春
人副 市島春
目丁二町上之坂市島春
計報新越北



市島春

大量趣味

自分は何で呼ぶの。趣味に大量趣味に...
趣味とするものはいくらかある。學...
は字宙萬有を觀察し、無限を説き...
無窮を説く。大量趣味家の口癖...
はこれであらう。同く大量と説く...
ものは年度の傳典である。傳典に...

有たない。經文にある大量をさ...
から轉寫の出題目であるかの如...
く、徒らにこれを誦するに過ぎな...
いのは惜むべきではあるまいか...
日本は環海の島國で久しい知識を...
領してゐたからいくらか印度哲學の...
感化を受けても氣字が狭い。分量...
についても圓めて大きいものは...
少ない。例へば生産などでは何物...
もハンド、ウォークだから美術品...
は世界に誇れるものが出来たにし...
も其分量は甚だ小なるものであ...
つた。耕稼すら機械に多く頼らず...
手で種を播き手で刈るといふ始末...
であるから大量生産など起るまじ...
はない。競争をするにしても極干...
一個を消費物として掘り取らる...
のだから事は簡單である。工業は...
多く個々に營業せられ、大工場といふ...
ものはなかつた。但し長い間日本...

に大量の趣味の発現は絶対になか...
つたといへないが、餘り多くあ...
るといへない。佛敎の影響から...
壯大の寺院が多く造られたり奈良...
の大佛の如き印度にもないほどの...
プロメの大きき塊りが出来たな...
どは大佛のうちに、數へてもよから...
う。封建制度の關係から多くの城...
が置かれた中に大規模のものもあ...
るがそれも少数である。人物につ...
いても日本を狭しとして海外に誇...
み出したものはない。徳天閣は朝...
鮮征伐を企てて征伐せんとして...
た。また戰國時代に日本の領土を...
越えて隣邦を侵したといはゆる後...
もある。これ等はともかく大量に...
趣味を有つたといへるであらう。

野心...世界侵略の大量趣味から...
源を發し有史以來始めての大戦が...
起り参加の國々は國力を盡して戰...
年の間闘つ。兵隊でも兵器の数...
でも馬の數でも物資の消費の額...
でも國の強弱も實に莫大なる...
のでその量、大なる事は邦人の如...
き小なる頭腦にはガラスの出来...
兼ねるほどのもので、しみじみ大...
戦についての教訓を得た。世界大...
戦、舉句國際聯盟が出来、軍艦の...
脚蹠が起り平和を將來に企圖する...
計畫はさまざまあるけれども、事...
實は遠からぬ未來に國際聯盟の...
るところから兵隊軍艦は大量とな...
るばかりだが日本で世界に誇り得...
るものは實に軍艦に伍して二三位...
にある。世界の列強に伍して二三位...
に躍進が出来たのも軍艦が優勢で...
あるからの事であつた。かゝる人...
義の機關の大敵であるのはめで...
たい事ではないが、今の物量なる...
世界に立つてはこれもまた巴を...
得ない。世界戦争の舉句一時景氣...
の好かつた事もあつて大量の金...
動量を見たが、時價もいく十億...
に暴落した。大量の動きが社會...
的に現はれれば普通が行された...

皆大量を趣味するものであるけれ...
ども、大量であつてよいものとわ...
るものがある。
大正年度の地誌は半世紀の文化を...
全歐に圖したほどの大規模のもの...
であつた。が、その大規模の再来は...
誰も望むまい。輸入が年々甚だし...
く超過したり失業者が感念に病...
たり國債が進々償むなどは、大量...
にならざるは困りものである...
自分が脚蹠の水電を説き、脚蹠の...
多量出版を附べたのなども皆な大...
量趣味の一端をいふに過ぎぬ。
は大量趣味は國の根本でこの...
趣味がなければ國は進歩しない...
個人としてもこの趣味を欠いては...
規模が大きくなり得ない。今日の...
日本は最早何につけても少量で満...
足すべきでない。然るに自分の量...
も不満を感じるのは生産の上に大...
量のない事である。窮乏大量生産...
の趣のやうにならば國は進歩を...
いのでない。自分は何人も少量を...
もつて満足せず大量を趣味とする...
やうありたいと思ふ。さらに進ん...
で大量趣味を國民共有の風尚にし...
たいと思ふのである。

No. 14

北越新報

日八十月二十

行發 市島春
人副 市島春
目丁二町上之坂市島春
計報新越北



市島春

山中共古

その遺稿一冊が自分の手に落ちた...
その書は著して「遺書(遺稿)」といふ...
のである。百枚ばかりの半紙本で...
氏が自略の近年の圖書のカツアの...
打出しを拓したものだ。そしてそ...
の数はいく百を數へる。各々につ...
き氏自筆にて署名著者をしてゐ...
る。巻首に三竹竹清氏の狂歌があ...
る。共古氏とは交るの機会を得なかつたが...
りそれが題字代りになつてゐるが...
本をよむ指子にできよむ本の...
表紙にできよ本にしてありける...
大正八年己未六月三日竹清...
共古清題

共古山中氏は近頃の好事家として知...
られ相當考証の能があり、若干の著書...
もあつて皆考証に關してゐる。昨年疫...
したところから遺稿を買つた。自分は...
共古氏とは交るの機会を得なかつたが...
りそれが題字代りになつてゐるが...
本をよむ指子にできよむ本の...
表紙にできよ本にしてありける...
大正八年己未六月三日竹清...
共古清題

くどき節
むかし市井に流行したくどき節...
は多く心中物を取り入れて互成な...
どに附し讀みあるいて買つたもの...
で、一種幼稚な新聞のやうなもの...

裸体美人の像
初めて支那の後藤朝太郎氏の支...
那長生秘術を讀んで知る事である...
が支那の藝妓店に往々象牙細工の...
裸体美人の像がある。四寸厚至六...
寸位の大きき多くは足を伸ばし...
て脚蹠し脚蹠を圓盤などで描め...
るものも延ばしてゐる。随分精巧の...
手もあり時代や、手澤を凝して琥珀...
と見まがうほど置かれてゐるやう...
なものもある。それは何の用に作...
つてあるものか迷断するものは直...
に性慾に關係のあるものとなせど...
全く別な用をなすものである。支...
那の富豪の女流は病んで脚蹠を招...
いて身死して身を手で觸れさせ...
ない。そこでこの裸体美人の像が必...
要となるのであつて脚蹠にその像を...
示し、患部はこの邊であると人形...
の四肢や各部について示すのだ...
されば富豪には必ずこれが備は...
つてゐてなかく驚嘆なものである...
そらだ。

寄園雜草

脚蹠秘術

夕刊 北越新報

日十二月二十

発行所 北越新聞社

No. 16

春城漫談

市島春城



霧島山を遊覧したもので女仙遊天... 女仙

深山には種々傳説のあるのを... 女仙

余嘗て霧島山中に女仙あり... 女仙

とて、その桃を與へらるを... 女仙

に餘れを眠ふから導かれたといは... 女仙

を汚穢に委する事が確にこの病を... 女仙

水と日本の国民性

日本人が水に恵まれてゐるのは...

日本に長く駐在した醫術の大家...

No. 17

春城漫談

市島春城



方松井某が西方よりとして入選し... 世界早廻り

昨日文明協會の茶話會に荒木東一... 世界早廻り

もち論だが同時に安設の道を選ば... 世界早廻り

進の法を講じた事もあり、それ等... 世界早廻り

れに頼り、一路三千哩も飛んだ... 世界早廻り

る學者風の間は持重を欠く事が... 世界早廻り

趣味の下落

女性の美は眼に在りといふ西洋... 趣味の下落

は眼が眼の誘發の具であつたの... 趣味の下落

が、近頃下落して足に移つた。女... 趣味の下落

性もストッキングや靴に力を籠め... 趣味の下落

寄園雜草

兎首詩室載

刊夕

北越新報

日九廿月二十

編輯 佐野 行發
副編輯 市川 長
印刷 北越新聞社

No. 19

春城漫談



市島 春城

伊藤侯の

朴永孝談

侯は帝國ホテルの一部を借り受け、...

多くの官吏を採用する場合に早稲...

と申して来た、宮廷よりも朴の...

對して自分の云ふにはそれは御...

たるなり早稲田の連中を内買...

刊夕

北越新報

日二十月二十

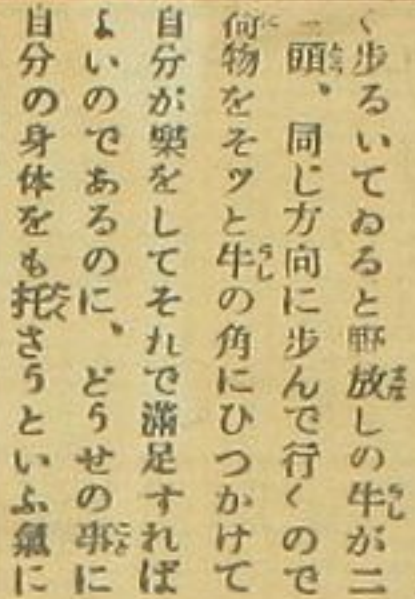
編輯 佐野 行發
副編輯 市川 長
印刷 北越新聞社

No. 18

春城漫談

市島 春城

人間と牛



昨夜宗家に招かれた宴會中に諸橋茂...

それを隠して一ト當ててあると...

が背を拜借するの支那ならでは...

返翰秘略



赤化防止の一策

歐州諸國でも赤化の浸潤を防止し...

返翰秘略

返翰秘略

刊夕 北越新報

日十三月二十

行發
人創
市岡
支
計新越北

No. 20

春城漫談

市島春城

文藝界の傑物



日本に於て文藝界に元祿の傑物を近
目とすれば應永の傑物を世阿彌とせ
ざる能はず、世阿彌の前には観阿彌
あれども能く、味あるものとしたら
全く世子の功也也世子は大天才也大才
得て一層大才を發揮する便を得た
るは疑ふべくもならず併し一種の
カクアの殆ど抜く可からざる迄に至
りたる藝術を一變してそれを誰にも

なるが上に足利將軍の奇蹟を受け
たり表面こそ徳人扱ひを受けたら
ん、事實は左右に侍するを許され
たると明らかである。將軍の寵を

歓迎さず遂に工風したるは不世出
の大天才にあらずんば出来がたき
也。世子の威儀、凛るに世子の
心も大切とし尊厳としたるは物質
似といふことにあつた今日こそ物
質的な面と云ふは人情に近づく
の意である今日のこぼれに云へば
事實と云ふと同じく當時に於て斯
るに考へ至り再演の打破を試み
たるは一大卓見と謂はざる可らず
當時行はれたる音楽は雅楽と云ひ
薩馬楽と云ひ田楽と云ひ命樂と
云ひ多きは時勢にかなぬ人情外
れの物のみなりしそれを打破して

人情に關するを主として新案を立て
たる卓見と手腕は實に驚歎すべ
き。其の時代に於ては論議を立らる
は其の時流に非ざればならぬ。其
の音階の抜きその長所、綜合し
たるものである。この取捨綜合も
固より天才にあらざれば得ざら
ざるものである。或は今の曲論者文
章の七五調を是非其の引用語の
無味味を非難し更もすれば文章の
脈絡徹底せざる瑕疵を云々するも
あれども實は思はざるの甚しき
もの也新作を當時に行はんとすれ
ば成るべく其當時人口に膾炙し人
耳に慣るもの語を引かざる可らず
多くの音楽より長所を取らんとす
は七五調のごとき文章を踏らざれ
ば隨意にいろ／＼のものを取り込
みかたき不便あり。外にも今日よ
り見たらんにいへば、其の形骸も
あらんかなれども過渡の時代、殊
に流行を待つに於ては己むを得
ざる事と云ふべし。世子は自
から作り目からたひ又自から舞
ふ此二拍子を兼ねる事は文藝界に於

江州商人氣質

福澤屋

江州商人は一種の氣風を有して居
る其風は清剛に酷似して居る支那
人は物を購ふに、取るとも釣銭を
取らざれば已まない。曾て日本の
軍部探偵が清人を假裝して物を購
ひ釣銭を取らざらざつた、これ
が発覺の動機となり終に逮捕され
たる事があった。江州商人に付き
は株式借貸の語を聞くに、其事
が如何に何處地といふ、即ち確定に
一線や二線の事はどうもよきそ
な事と日本人の思ふに反し、幾
の確信と雖もどうでもよきなどい
ふことはなく必ずキツチリ計算す
るにあらざれば承知せずといふこ
とである。

福澤屋吉藏が會つて福澤屋と云ふ名
で書物出版業を営んだとある。其
頃福澤屋もいくらか存して居る
そのな、これは福澤屋のおもしろ
き川端として傳ふべきで決して忌
むべきで無いに、遺子は何故か
事蹟の内より此一事を除くべし、
福澤屋も圖書館などで公認せぬ様
に註文したと此頃福澤屋の人の語
を聞いた。小野梓氏も曾て自ら
東洋館書店を開き書物屋の主人
となつたことがある、文明歌吹の
ため書物屋となつたと云ふなど
が聞かせるべきである、其れが
新前後まで商家を専らに、福澤屋
が破格に屋敷までつけて書物屋を
遣つたまでは益にあらずんば出来
ぬ業である。

(可認物便郵種二第日五廿月三年五廿拾明) (休無中年)

No. 21

春城漫談

市島春城



大正六年五月十四日に、家の祖傳の市
島徳厚君を伴つて大隈侯に面談した。
これは先代市島徳大郎氏死去の節侯爵
より花輪を贈られたる謝儀を陳べる爲
であつた。福澤屋吉藏の遺子より宮中
を許されしこと及び、侯は奥よ、これを
其地味を特に取寄せて示された一紙は
全体が小形のものと云ふ

刊夕 北越新報

日十二上
計新越北

大隈侯の御前謹話

かは牙にて歯を刻しあり、他は龍
眼木と云ふ木にて石つきはツムで
ある。ツカは光山の作に限り、鐘も
刻しあり如何にもよき出来である
明日はこの札をつき御禮の爲め
内ある筈と承はつた。

大隈侯の御前謹話
曾て大隈侯に御前して横濱市の原
高太郎氏等に呼ばれたる際、侯は
東京府下に拜訪したる時の事を仔
細に話されたが大要は左の如くで
あつた。

自分は東京府内に拜訪を請る時

は、一場の演説シテお話を申
上ることか始と横柄となつて居
つて、陛下に於ても御期待あつ
た様だ。先頃の御成年式には自
分身体不自由のため参加せざり
しに依り拜訪したる縁起たる所
この度には特に御居間に於て拜訪
を賜り、例のごとく何か話せと
の御言あり、自分は依つて謹心
でお受をして三十分許り演説を
申上げた。その要領は今度の演
和談に於てドイックに對する英
米佛の態度の各々異なる事を説き
経新の侯府を處分するに
長各々その態度に寛政の相違の
あつたことに引續て、ドイック
を御府に比し、佛を長州、米を
薩摩に比した。薩摩は御府と婚約
した血縁上の關係があるから、
薩摩は徳川家の處分に關しては自
づから寛らざるを得ない。即ち
薩摩が二百二十萬石を興ふべしと主
張したる程なり、これは米國が

種々の事情よりドイックに對し寛
なると同様の事である。然るに
長州は徳川家の處分に對しては
寛大な態度にしてな。薩摩の
寛大な論に同意すべくもあらざり
し。其意は所傳長州征伐と云
ふ侯府の處置に長州のひどく苦
められ、その怨み骨髄に徹する
心理状態は薩州と同じからざる
ものであつた。これを今度の交
談にその比喩を求むれば恰も
佛國にその比喩を位置して、佛國
に於ける侯爵の論は尤も佛國よ
り出でたるも無理ならぬことな
りと云ふ様な比較論を試みた。

と譯られた。斯る談話を申上る時
には尾尾氏その他老の侍は必
ず傍聴するか例となつて居ると候
は譯られた。

陛下に拜訪して三十分
ししくは一時間にかかり、退席を申上
ることあるが陛下はいつもし左
右のものを撥はれてひとりと

になるが例となつて、大隈元老
や大臣は五分か十分用だけを腕
單に申上げて引下るが常である
のに自分のみ人拂ひで長談を
する所から、大隈は何を言の上
及ぶのかと氣を揉むものもある
そうだが、實は氣を揉むほどの
ことを内奏するのではない。佛
し氣を揉ませるものも一興たら
ずとせずと笑はれた。

御前下見に御見申内閣總理大
臣の拜訪を御ひ出るともある。
自分は國務の關係を斷念し斯る
場合には必ず退出せんとするを
陛下下見の時御引留になり、
遂に及ばぬ待たせて置けとお
命じになり十分も二十分も首相
の拜訪を妨ぐる事がある、斯
かる場合は氣の毒に思ふなどと
譯られた。(大正八年五月廿九
日)

奇聞佳事

兒童會社

青島新聞

神州新聞

寄園雜草

神州雜草

(休無中年)

(可認物便郵種三第日五廿月三年五廿治明)

北越新報

發行所 北越新聞社
編輯人 藤吉留郎
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

No. 22

春城漫談

市島春城

大隈侯天杯拜 受祝賀會演說



の少時者と共に招かれたるが、今度は大隈侯の祝賀と認めて可なりであつた。侯の船上の挨拶は僅かに依

大隈侯は五月六日に早稲田なる大隈侯邸に天杯拜の祝賀の内意があつた。早稲田侯邸の主人は千四百五十五名を招き、金碧は天杯拜の當時特に侯邸に近き。座中人も侯は先頃皇太子殿下に拜訪せられたる時の事を大隈侯の如く語られた。

するを欲せざることを言ひ、是れ斯かることを自身もせず、人の善心にも應ぜぬ、而るに今度天杯拜受したる恩恵を感謝する會を開きたる所以は敢て過去八十年を經過したるを祝するに非ず、將來の憂鬱と理解を行ふ前として開きたるなりと謙べ、漸く本論に入り自家の歴史を語られた。

環時の主權は大御所にあつた將軍家府は隱微せしむる政治をみづからした。國中農島に困しむるの聲、野に滿つるも軍を伺ふることなく、大御所は安如としてみづから驚愕を極めた。暗に大正の外界にも山縣ありとてこれを言外に諷し、斯かる時に不平は起らざるを得ぬ。大隈に於て大隈の不平の勃發なり、自分は幸か不幸か恰もこの時に生れた。

自分が國家に御功ありとせばこの不平の爲め多少騒きたるに依る際である。自分は失職者なり、功罪相償ふや否や覺えなし。然れども總て予國家の文明に對し満足するあたはず。即ちいつ迄も不平である。早稲田大學を起したる如きも又國運に據らずこれを助けん爲めの不平より出たこと言ふ迄もない。然るに今は在學一萬、卒業一萬數千を算するに至る。之等は皆國運を助くるの動力にしてその力は甚だ大である。國運支那の學生の早稲田に受けたる無慮千五百人これ等も亦余と同じく不平無き能はず、その氣を幸り國に歸るやその氣持せる不平の氣は終に革命として勃發したと暗に支那の國運を左右する原動力は早稲田にあることをほのめかす處流石に侯の氣概は偉大である。

北越新報

編輯人 藤吉留郎
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

No. 23

春城漫談

市島春城

東宮殿下御外遊 に大隈老侯の嘔



大正十年二月廿七日に大隈老侯の時義にかゝる文明協會の茶話會を大隈侯邸に開いた。開會前に侯は實に面談した。座中人も、侯は先頃皇太子殿下に拜訪せられたる時の事を大隈侯の如く語られた。

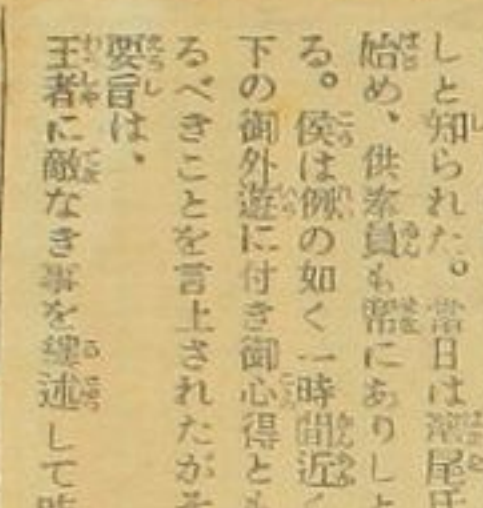
侯の嘔は眞に師傳たる人の嘔也、外國の宮殿の美に眩し、氣性れし結ふな、瞞目も隠れず瀟灑あれなとの注意もあつたとか、君親の言とも見るべきである。

大隈侯講和 會議を評す

大正八年二月三十日に早稲田の邸

日七月一年六和昭

(可認物便郵種三第日五廿月三年五廿治明)



侯の嘔は眞に師傳たる人の嘔也、外國の宮殿の美に眩し、氣性れし結ふな、瞞目も隠れず瀟灑あれなとの注意もあつたとか、君親の言とも見るべきである。

大隈侯講和 會議を評す

大正八年二月三十日に早稲田の邸

大隈老侯を諷刺したるに際し、客なく侯と一時開會に際し、談笑した。中に侯は講和會議の將來に對して左の如く語られた。

歐米の國運も海外に於て、歐米人の財産の聯合與國に存するものは皆没せらる。譬して日本に於ける獨人も亦この厄に遇ふものである。これ取りも直さず一種の國運である。斯る没收を以て戰爭に失ふ損失を幾許とも値はんとするは勿論なれども、今頃列強時代の國運を罪もなき歐米の個人に行はんとするも古臭い限りなり、日本の如き講和會議に於て斯ることを空々反對し、口には國際の公道とか權利正義とか云ふて居る本家本元の列強に罪を明かすべしに、侯の如く侯の對語したるは遺憾である。又歐米の國運を没收して余翁に對すること、國運を行はんとするも亦古臭いなり。昔は個人的氣概は万能なりし趣きあり、隨つてその人の存するを不可とせるも、今は個人の性格如何に家なりともこれを目的上にあぐべき時代にあらず、歐上の獨乙に前帝を置きたりとて、どれほどのことかあらんと語られた。

刊夕

北越新報

No. 28

春城漫談

市島春城



海に來りて水鏡に投函して
た。露木方では平吾の遺中を
量して五日を懸た頃資料の請求
をしたところ、今日は梁四郎を

安田翁を刺した朝日平吾
自分が熱海に遊んだ折、平吾主人は
安田翁大尉を殺害して目録を盗った
朝日平吾に就て左の如く語つた。
平吾は安田翁を殺害す少し前に熱
訪ふつもりだから歸つてから仕
縛ふと言つて出立したが、夜に
成つても歸つて来ない。不審に
思つて平吾の取戻して行つた風

尸敷包をさらべたら、決死の書
置があるのだから一瞥を要した。さ
てはこんな奴かと後の面影を思
れ勘定は確に疑つてもよい。脚は
くは歸つて来ないやうに暗に
斬つて居たら、其注文通り終
に歸らなかつた。それでは何處
へ行つたかといふに露木を出て
から鏡浦の岩上をさまよつて居
たが、そこにある茶屋に腰かけ
たのが縁となり十日程も其茶
屋の厄介になつて居た。この機
茶屋の主人は石渡七郎と云ふ
者、富士屋と同姓で末家になつ
てゐると、この石渡は茶屋上
り餘り遠くない所に家を持つて
ゐる。夜分は平吾だけを茶屋に留

て自身は家に歸つてゐたが、一
夕間に平吾が訪れ來つ
て、兼ねて話の土地を自分にま
かせてくれれば、必ず東京の
成金に大金を以て買つてやる
(此土地に就ては七五郎が愛ね
C話して置いたものである)そ
れには一種の遺文が入用だと言
つて強迫がましい。目録と遺文を
書かせやうと、殺意が濃く、い
だと言へば必工奴しかねまじき
勢と見てとつた七五郎は覺悟
を以て、殺される程なら死な
に抵抗してやうと火箸を燃手
に死の体で闘つたところ平
吾も恐れてか其處を去つて行方不
明であつたが、其後程なく大
正十年九月廿八日、大磯に安田
翁大尉の遺體があつた。平吾
は七五郎方に居た。聞かぬに
の事を口走り、死の体で闘つた
は死なぬなど言つてゐた。
熱海の此事は當時新聞にも出な
つたから要に話して置く。(大正
十二年一月)

軍隊規律の 杓子定規

熱海の御成城は海軍に在るがも
とワサと谷のあつた處だ。一日
内道と君と共にこの城の門を
つた時、道彦君は左の如き話をし
た。
熱海には個人開業の醫師で相當
の人が無いので、いつぞや自分
が病氣した時はこの城長の診
察を頼つたが、爾來醫者になつ
てゐた。ある時この城長、院長
や訪問した際下度い折だから
構内を御案内せしめようとい
つて兵士の帯をいろ／＼見せて
貰つたが、如斯に可憐に可憐
いことがあつた。二十名ばかり
の兵士が浴場に居つたが、城長
が來るのを見てと列を一聲に足
並を揃へて起立し、帯の端を
つた勿論、帯のまゝさ、浴物は
皆院長に對してあらはにさらけ
出されて居つた。これを見て可
笑しく感じたと共に、これを見て
如何にも杓子定規なものは一
瞥を要した。(大正十二年一月)

刊夕

北越新報

No. 29

春城漫談

市島春城



保存して置けば他日役に立つもの
が少からずある。商賣が發行する
書籍の目録等でも時價が書いてあ

目録の應用

近年漸く目録の應用が盛んになることは
目録の作製だ。可も實際の世の中であ
るから目録の作製するのには注意しな
げらないが、目録にもさまざまあつて
一時の役に立つものばかりではない。
るから他日は参考となる者だ。書
誌の獨立目録は書籍其物を寫して
收めてあるから、圖表を見るの爲

考として所蔵者を知る爲めにも
参考となる。この十數年貴族階級
の書籍の獨立が盛んで隨處に用
かけた目録が澤山に出でゐる。從
前は大體の諸侯の家の者などは種
見も出來ず、どんなものがあるか
想像もつかなかつたものが、どん
どん目録にのつて出るやうになつ
た。全休目録にはフランクシート
のあるが、進んだ目録の作り方で
あつて書籍の目録にもこれが必要
であるが、書籍作製の際にはこ
れが行はれ出したが、書籍などに
は既に二三巻の標本を収める位に
は過ぎぬ。商賣の目録は買の便に
供する一時のものに過ぎないが、
それにしてもいろ／＼の役立をな

す、況して時種の研究の爲め作つ
たものと大別であることは要説を
要しない。近年は各館の陳列があ
る毎に多くは目録を製作する、そ
れには種別があるが委しいものに
なると、その物に就ての解説まで
委しく録されてゐるし、學術的に
分類してある。目録も斯くあつ
てこそ役立をなすのである。いく
ら種別のあるものを原圖に供しても目
録が添はないでは眞に遺憾無
陳列の甲斐もないのであるが、目
録を作ることは而論でもあり、多
少費用もかかる爲めにこれ迄省略
されたが、漸くこの弊を當然とし
るやうになつた。物の陳列をしな
いでも、特殊の研究家がその蒐集の
材料の目録を公開したり自家の私
的蒐集の書目録を發行したり、地
方では郷土史料、寺では宗教書
目録、或は國寶の目録、圖書館に
その書籍の目録、或は部分的に古
籍の本の目録、複製本の目録、總
覽書目、標本目録、本館書目録、
學生書目等々、研究家、好事家が
思ひ／＼に目録編纂に意を用ゐる

やうになつて來た。好色本の目録
などは昔既に出來てゐる、今も内
蔵に作つてあるものもある。種別
やあふな種別の目録などもその道
の好事家には作られてゐるが、公刊さ
れないまでの事である。近頃は明
治の初期の出版物に興味を持つ人
が可なり多くなつて、種別と同
時に、その目録を作つてある人もあ
る、時代別に目録を作ることもわ
る、計畫でない、過日は京都の好
書家が書目の目録を作つて自分に
も寄せて來たか、それは最近の
書物屋の目録まで収めてあるので
感じした。自分の處へ毎月寄せ來
る各種の目録は決して少なくない
自分には目録に對して一種の理屈
有つてゐるから、複製保存して置
くが、實は多きに堪へないので、葉
たものも少なくない。それにして
も手冊には存してゐるであらう。
私は一體の人が目録に對する理解
をもつて置たい。そしてそれを深
存し且つ役立てるやう心がけて欲
しいと思ふ。(昭和四年十一月七

寄園雜草

兒童詩

寄園雜草

兒童詩

夕刊 北越新報

發行所 北越新聞社
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

No. 30

春城漫談



市島 春城

藤田茂吉氏の金時計

三親の取組五郎、三井の朝吹英二、君など、藤田君の時代には、實に儼然な生活をして居たものだ。曾てその時代の逸事を朝吹君から聞いたことがあるが、頗る興味があつた。藤田茂吉君などは金時計を買ふたことによるとその頃朝吹君、市島君、めに百圓取りの無盡を作つたこと

がある。さて夫に於ては誰か一番先にこの金を取るかと言ふ段になるとその頃藤田君は既に報知新聞に筆を執つて最前線の中に身を出して相當の賑が好かつた。同君が最も時計の必要に迫られてゐるからとて、先づ藤田君に「一腕を貸して、先づ藤田君に一年の金とやらを貸して、藤田君は多年の宿望をみたし、幣のあたり金にカバの光輝を添へることゝなつた。或る夜この喜びを表す爲めに藤田君は朝吹君を或る島に招いて一杯を傾けた。その時市島君に金

加藤高明伯の失敗談

時計を物珍しげに、ひねくり廻してゐる内、朝吹君は時計を滑り落し、鐘の息の縁にブチ當てた。すると元々ナクノの鐘、鐘の時は忽ち大筒を印したの、藤田君も朝吹君も青くなつて大根を吐きだした。

名古屋の或る會の席上にて、朝鮮人の執事なることに就く種々の座談會が出たが、この時藤田君の加藤高明伯は往年外務省にあつた際、一會て朝鮮王の誕生を祝賀するに附かず、誰も朝鮮公使館に出かけ、祝賀と去さなかつた。そこで外使は不快、感に外務省へやつて来て、何氣ない様子で突突問ふて言ふには「貴國外務省では各帝王の誕生日に相當の禮を齎さるゝ光栄がありませうか」と。朝鮮王の誕生

殿に氣付かぬ外務省加藤高明伯は何の氣もなく無言先づがあると答へた。すると外使は「しからばさやうな先例のあるにもかかはらず何故我國王の誕生日に限り贈りその例に據らざるは如何か」と。藤田君は即答して来た。これに對しては實は外務省も或つたが、ソツトの事で善い一語を得て我は豪然として答ふるには「歐米諸國は皆我輩と同じく太極圖を用ひて居る。唯に各帝王の祝賀を知るに過ぎぬ。たゞ貴國は太極圖を用ひらるゝので、東洋に不便多し、我もすれば太極圖の對照を過すゝるゝ。これが今日行儀ひての不潔をなしたのではない。幸ひに意に掛けぬ様に願ひたい」と答へたが、この時は實に苦かつた。藤田君も、加藤伯も困つた時の話をされ

夕刊 北越新報

發行所 北越新聞社
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

No. 31

春城漫談

市島 春城

貞操帯



月一年六和昭 (可認物便郵種二第日五廿月三年五廿治明)

のと見える、支那には無論ある。貞操帯の語は恐らく支那にてつけた名であらう。英や佛の貞操帯を模倣するため男子の腰より生ずるものであらうと思ふては、得ざる手前を行ふ習慣があるとい

ふ(結婚する時は反對の手術を行ふ)或は宗教上戒律を制するため、或は形式にこれを應用する處もあり、或は歌手、俳優の露を美しく保つ爲めに性的關係を禁する目的で男にも、其帯に輪をハメルことがあり、武勇の人の勇氣を減殺せざらん爲め同様の事をなす例あると云はれてゐる。

或は父母が少女の淫淫するを防止がん爲め貞操帯を用ひ、それを以て處女である証とするとする處もあると云ふが多分、その正から起つたものが終には結婚の爲め警官行使防制の爲め専用ならざるに至つたものであらうか。これにはいろいろの意見も齎らされてゐるであらうが、鐘などで作つたもの

が佛蘭西の博物館に陳列されてゐると云はれてゐる。無論金銀などで作られたものもあり、今日では更らにゴムやセルロイドやいろいろになつてゐるだらう。鐘などでも、さまじい工風があるであらうが、アダムとイヴを畫いたり、彫つたりしたものもあると古書にあるが、鐘を掛けて鐘は真人のみ懸つてゐる所から、この鐘を賣るものが鐘に正副二た通りの鐘を作り、副の方を高價に賣りつけることもあるといふが今日コンナものを製造して賣つてゐるものがあるとすれば無論ソナチン製造を考へてゐるに相違ない。

近世は西洋輸入があれは格別、要するに野蠻時代の遺風であることは言ふまでもない。ヴェニスに産するからヴェニス格子の名がありベルガといふ人の工夫だと云ふのでベルガ錠などの名もあるのだ、ワインや巴里では今も製造してゐる處があるといふが、多分好事の日本人は密に所持してゐるであらう。(昭和二年九月二日)

N. 33

刊夕

北越新報

行發 編輯 印刷 市長 市所 行發 市長 市所 行發 市長 市所 行發

春城漫談

市島 春城



た、この人は田舎に慣いほどの... 幼少の頃、表具屋の職を習ひながら...

金が去らず、自分はそれをやらぬ... 誰れか一族の内に職を...

日おそびに出かけて金箱をおく... 木地に布を敷き、トノコを...

に慣らうことも情味のあるもの... 平好はいつも酒へ足がむくが...

れるからである。張りも... 職を習つて見たが、これは...

No. 32

刊夕

北越新報

行發 編輯 印刷 市長 市所 行發 市長 市所 行發 市長 市所 行發

春城漫談

市島 春城



くプロレタリアの状況を知らない... 人が大體已の趣味嗜好性...

に慣らうことも情味のあるもの... 平好はいつも酒へ足がむくが...

れるからである。張りも... 職を習つて見たが、これは...

寄園雑草

見習書時

寄園雑草

見習書時

寄園雜誌
昭和六年三月五日
北越新報

北越新報

發行所 北越新聞社
社長 佐藤 吉留
編輯 市川 龍一
印刷 北越印刷所
社址 北越市上町二丁目

No. 34

春城漫談

市島春城



百貨店は街路の延長

かせるやうになつた。私はこれを歩する毎にいろ／＼のことを思ひ出すには居られない。下足の間

日何とといふ人の出入に、一々下足を預けることは出来ない相談でこれが爲めに混雑を生ずることは既に頗る多くなり、自分なども幾度もその混雑に出合つてゐる。格別大衆の出入しない處では今も下足番が置かれてゐる。學校や圖書館などでも下足問題は毎々起るがどうもよい方法が無い。大衆を取扱ふ百貨店に下足番撤去を實行したのは眞に考へれば、下駄や足駄に打撃の考へれば、下駄や足駄に打撃されても大なる顧客を吸入する方が利益であるに相違ない。下足の煩はしい取扱ひは或る意味に於て入場者を制することになる。各店が撤去を願つたの

は偶々でない。靴を言へば百貨店は市島の延長とも見るべきものだらう。どんな履物でも靴とはいふものだが本當であらう、且つ靴と木履の差があるであらうか、成るほど木履の如く履かしたとき、成るほど木履の石の隙を下駄で履くは勿体ない氣がしないでもない、坐してもよい様な履物を足駄で歩くのはいかにか氣もあまるが、それは長期間西洋靴を不相應に重んじた感傷がなす業で、靴で歩いてよいと思つれば日本の履物で歩いて悪い道理はない。西洋へ始めて出かけた人が立派な花冠を靴で踏み歩くのを見て驚いた例があり、椅子に慣れないで、靴で踏む花冠に重なるを見て坐した例もある。全体外國のもの云へば、一徹に尊重して靴で踏むものは、數物を尊ぶ上にして、今も飾りとするやうな家がいくらもあるが、實はおかしなことである。靴は無常にも當るものである。靴し家庭にも靴を脱ぎ室内も靴で終始する西洋習俗からすれば、大理石の下駄を

昭和六年三月五日

和昭 (可認物便郵種三第) (二)

No. 35

春城漫談

市島春城



旅館は汽車の延長

都下四五の大百貨店はその規模が特大であればあるほど、街路の延長であるかの思ひを爲す、亦事實街路の延長であるならば、同じ方法で論ずると旅館は汽車や汽船の延長であらねばならぬといふ大石を踏ませる途に開放したのも畢竟街路の一部と見ての通り、汽船に接続しない間は不便は實り方であらうとは前にも言ふたが、

れて停車場附近には旅館の支店が設けられてゐるが、多くは休日の本屋に過ぎないので、可なりの人、宿所を通しないから餘り役に立たない。中央停車場にはステーション、ホテルが設けられたが、これこそ幾々臨時的に出来、汽車の延長である實を現してゐるが、都下何れでも今なき汽車を降りてから、自動車に乗つて可なり時間を潰さねば旅館に達することが出来ない。この點は昔も今も少しも違はない。

音楽は世界語

街頭に理髪店の控を見る、それに伴つて響いてゐる、音響で今日流行の音楽を聴かせる設備があるとの吹聴であらう。音楽は世界語であると言ふが言ふたが、或る意味に於てそれは眞實で、何んの意味だか分らないにしても音楽は妙に人の心に役じて遊ばせしむるものだ。唯、他の遊藝場にも西洋音楽は今や必ず附属するものとなつて、人は喜んでそれを聴くやうになつた。但し聴く人の意識が他のでいろ／＼に聞かせるには言ふ迄もない。日本人は鐘の音を聴けば無常を感じる、鐘を聴くと反響するからである。西洋人はこれにして歌を聴くと、西洋人はこれにして寺の鐘を聴くと、彼等は鐘を聴くからである。ジャズなどは大衆の爲めに街頭工夫された低音の音楽で、音階に拘らず音響で取り込んだ刺激本意のものである言はず、雅趣のない俗なるものであるけれども、いつの世でも俗は雅に勝つのが例であるから、ジャズの流行するの不思議はない。西洋でこれが流行すると日本にも同じく流行する。音楽はエムベラントだと言ふのは眞實である(昭和五年三月)

昭和六年三月五日

寄園雜誌
昭和六年三月五日
北越新報

夕刊 北越新報

No. 39



春城漫談

市山表

記憶すべき

昨今は寄ると呼ばれる選挙が、選挙で持ち切つてゐるが、それに興味のない自分、五月の選挙で相手にならぬ、併し選挙に就て思ひ出がでないでもない、自分の

氏は東洋から迎へて、自分の説を反駁せしめた。その説は、選挙新聞三頁に映つて四活字に組んであつたが、それを讀んで見ると、編輯が餘程苦い。市山君は加物のことなど分らないと言ふて、たが、本流に就ての論は、頗る鋭

夕刊 北越新報

No. 40



春城漫談

市山表

甲越古状捕

り字を書くことを習はしめ、兼ねて字を教ふる具に當つた。今これを見るに以上の目的外に日本の史實を教へんとの用意もありしと

月日もあり、宛名も宛名もあれども、實は假託のもので、歴史上の事實を書體に託したためであつて、今日の所謂古文書に擬して作つたものだ。全体古状捕は何程あるのか又何人の手に依つて書かれたのか、自分の記憶にあるこの種のもの決して少くない。

頼春水の目記

いつぞや、甲越で頼春水の蹟を訪ふた折、水の遺物を多く見た。その中に日記數冊があつた。其筆蹟紙のごとき大紙にて綴つたもので、頼家の人此處を見れば、何月何日大變起る、頼家おこり家を出つ云々と山陽連電の事を記してあつた。

寄園雑草

兎首寺寺記

寄園雑草

兎首寺寺記

No. 44

夕刊

北越新報

発行所 北越新聞社
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

春城漫談

市井一畝



語ともつかず日本語でもない
いろいろの言葉も洗布したる。随分

用語の變遷

西洋の言葉が譯されたり或は原語其儘
に種新以來行はれてゐるものが少く
ない。近來は別してそれが多く、譯す
ることがなくなつた。なほこの外に西洋

奇麗な言葉を用ひたともある。今
はソサイターを社會と言ひ、パン
クを銀行と言ふてゐるが、種新
勿にはこの二語もなかつた。ソサ
イターの譯語には頗る困んで、世
俗或は俗間などと言ふたこともあ
る。食用品のチーズを白牛酪とい
ふたし、石油を石炭油と言ふた時
代もある。マッチを燐寸と譯した
のは當つてゐるが、リンストン
へたのでは當らぬので、嗚呼に苦
んで「燐寸」と言ふたともある。兎
角譯の職を離れ兼ねて、マッチ

に催された時は走阿と言ふ語を
用ひた。船に花魁といふのがあ
つた。あるといふ所から名をつけ
たのであらう酒にもおいらんと
言ふが、時行はれた、自分の大學
にある頃は常にこの酒を飲んとい
ふた。プロステチニートを約した
のである。北里をノルスと言ひ品
川をサウスと言ふた。高利をアイ
スと言ふたのは水の音が近いから
だ。自動車のゴムの破れたのを
パンクと言ふのを借りて婦人の孕
むとに應用したり不見轉(ミズテ
ン)と言ふ言葉は今も行はれてゐ
る。同じ意味でフランネル(襟ら
ず襟る)といふ言葉もあるこれは
廣く行はれてゐない。休日やド
タクといふたことがある。農合一
六に在澤山人の農家のあるのは一
六の日の休日であつたので、それ
から命じた農家である。官費から
思ひ付けて或る社會にチャンピと
いふ語が行はれた。市井に父をチ

ヤンといふから来たのである。廣
くはベケ、サラパンといふ言
葉が外人と交るに用ひられた。ベ
ケは(織ひ)サラパンは「打拵」で
あるが、こんな言葉は時早死語と
なつた。今は飲料が頗る種類多く
なつたが、昔はジン(ビヤ)とい
ふのがあつた。また曹達水を漢語
といふたことがある。乞食の社會
には種々の譯語がある。浮浪人を
グレシヤンと言ふも言ふてゐる
近頃譯語を其儘に用ひることが行
はれ出した。譯しては適切を失し
原語其儘の方が呼ぶにも都合がよ
くなつた。聖世の進歩であらう
正午を指する年輪が廢せられて
電氣什掛の時を報するのサイレ
ンである。譯語と言ふ名が廢めし
いと云ふので「事務所」と譯され
り、市街に自動車が行はれては
である所から、交番の警官が
出来たり、婦人の服装が多く出来
た中に派手な服があり、タイスト
があり、マネキンがあり、モデル

があり、バス、ガールがあり、ウエ
イトレス(女給)があり、女車
があり、エレベーター、ガール
がある。女給やダンサーの種も
ことは言ふまでもない。種新にも
いろいろの名が命ぜられ大體譯を
ビルデングと原語を用ひそれを約
してビルとも言ふてゐる。呉服店
が百貨店となつて、デパートメン
ト・ストアと言ひ約してデパート
と言ふてゐる。下宿が道々賃へ
アパルトメントに宿すること
漸く行はれ、クラブが初めて譯
され且つ譯法かられて來た。大體
譯はチエリン・システムの店
が多く出来た。高麗酒の下にガ
イドが出来た。飲食店は幾度多く
出来た。飲食店に幾度多く
名が多く用ひられてきた。バー
カヒー、ハラスの響出したこ
とが著しい。サウタージ(金庫)
ストライキ(罷業)用語が行はれ
出したのは可なり早いことだ。こ
れ等の事か實地に行はれてゐる。

No. 43

夕刊

北越新報

発行所 北越新聞社
印刷所 北越新聞社
社址 北越新聞社

春城漫談

市井一畝



既をおろすと間もなく一美人が
一、その隣に腰をかけた。それが

女賊

文學博士藤野一氏が親しく譯つたと言
ふて、或る友人が私に聞かせた話があ
る。それは短編小説にでもなりそうな
女賊の挿話である。
帝國大學の學生が本郷で電車に乗り

容易ならぬ美人で服装も立派、
持物も贅澤を極めて、一種人を
惹き付ける様な風貌を備へて居
るので、學生も恍惚として居
る。居るとして目録まで來ると
婦人は下車した。學生は神田
邊で下りる積りでは無いのだが
何となくこの婦人と離れ難い様
な氣がして、深くも考へず、あ
とについて同じ所に下車した。
當にも下りた下りたばかりで
はない、學生は婦人の行くあと
につき、見え隠れに數町を往
つたが、婦人は時々後ろを振り
返つて見る。それが何か自分に

思案でもある様に見えるので、
まさしく婦人を目失はない様
とつけて行く。ことに不思議
であるのは婦人の行路が頗る
れてある一車であつて一直線に
行けば近い處をわざと、順町へ
入つたり大通りを行くべきを
殊さら小徑を繞つたりして動も
すれば逆戻りする。……學生
はおかしく思つたけれども、偏
に好奇心に驅られて結局婦人の
行先は何處かと一心不亂につ
て行くと、……學生をしこ吃
驚せしめたのは此の婦人が三崎
町の某所來ると歩行を止めて
振り向きながら嬌然一笑「帯の
間より何か取り出して
これを示しながら
「これだよ」
と高く叫んだ。其の示したも
のが一個の懐中時計、學生は
ことに初めて氣が付いて自家の
懐中を探つて見るといつしかな
計が紛失して居るので、ここに

漸く此の事婦人は胸であつた
と言ふ事を覺つた(明治三十
一年一月)
墨
昨年の暮求めた煤油の墨を日々
磨して前月漸く六七分りの磨と
なつた。更には煤油の墨を買ひ來
めたが、なほ一寸に磨たぬ磨の
墨を惜んで磨ることなく、今日
に至つて初めて磨て来た。思はな
いにも磨に苦なる爲めではない、多少
の感あるに由るからだ。一休墨
を磨して一寸を減するには昨日を
費し、一寸を減するには昨日を費
すものである。してみれば一寸を
減するは自分の數日老
り、一寸を減するは自分の數月老
いることであり、磨又幾寸を磨し去
るは自分の一年老いることである。
自分の墨と共に時々刻々去る
を思へば、磨だいで感無量であ
る。予の磨餘の墨を惜んで容易に
他と換へるを欲せずこの故だ
(大正十年三月)

奇劇雜草

兎首寺に蔵

奇劇雜草

兎首寺に蔵

夕刊 北越新報

編輯 廣田 印刷 廣田
社務 廣田 発行 廣田
日丁二町上之坂 社報新報北

春城漫談



市の主義

用語の變遷(下)

人集は之に集まり、相繼ぎて... (Introductory text for the article)

諸のごとく説明さるるまでに開け... (Main text of '用語の變遷(下)')

日本はデパートメントストアも... (Main text of '市の主義')

北越新報

編輯 廣田 印刷 廣田
社務 廣田 発行 廣田
日丁二町上之坂 社報新報北

春城漫談

市の主義

廣い避難所が欲しい



人間は地上の動物であるから地を... (Introductory text for the article)

取つて用ゐたと言ふことも... (Main text of '市の主義')

寄附催草

税捐着時電載

No. 48

刊夕

北越新報

編輯 佐藤 印刷 北越新聞社

春城漫談

旅の思ひ出



一、木曾の陣地... 酒を買いに出かけるのに、吾も

旅の思ひ出 (一) 雨に降られて無聊に堪へず旅の思ひ出を思ふと立ち、種々記憶を辿り、順路外れのことを追々追憶して先づそのヘッドに譲るは左の如くである。

纏んで僅かに腰を懸した(帝大にある時代岡山豪吉君と同行) 一、關ヶ原に虎投の檢校所あり、三日の滞在を命ずるといふを不意とし那役所を訪ふて夜半まで

一、木曾の陣地... 一、關ヶ原に虎投の檢校所あり、三日の滞在を命ずるといふを不意とし那役所を訪ふて夜半まで

一、高田の新聞に... 一、高田の新聞に筆を執つてみた頃一日親不知の地を探らんと出かけた時に、隣道徳川が溢れて流ることが出来ない。川附近の

南魚町村と

看臨給料 九百三十二回三八、一人平均三十八圓

寄附催草

兎首寺詩三載

寄附催草

兎首寺詩三載

夕刊 北越新報

編輯行 丸井 印刷所 丸井
目下 丁字上之坂 市街
社報 新聞部

No. 49



春城漫談

旅の思出

「支那より歸る時、朝鮮海峽で船の濃霧に遭遇した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。」

ないかとの恐れもあった。各船は盛んに汽笛を鳴らして、危険防止を要するにやっていた。小舟は汽笛を鳴らして、危険防止を要するにやっていた。小舟は汽笛を鳴らして、危険防止を要するにやっていた。

尺の堤下に墜落した。幸ひに怪我はなかつたが、衣類は汚れ、大阪への夜歸、豫感が狂つて伊豆の上野に宿泊した。

旅の思出

一、支那より歸る時、朝鮮海峽で船の濃霧に遭遇した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。

一、支那より歸る時、朝鮮海峽で船の濃霧に遭遇した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。

いものである。旅の思出の主旨所に在る。その味は普通旅人の想像し難いものだ。

一、支那より歸る時、朝鮮海峽で船の濃霧に遭遇した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。

一、支那より歸る時、朝鮮海峽で船の濃霧に遭遇した。二十時間程の嵐を乗り切ると、船は霧を振り払って、大海に出現した。

夕刊 北越新報

編輯行 丸井 印刷所 丸井
目下 丁字上之坂 市街
社報 新聞部

No. 50



春城漫談

「一杯もわらわらない。阿部 隆正君と四十日に渡る徒歩旅行で足元を潰れ、阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。」

「一杯もわらわらない。阿部 隆正君と四十日に渡る徒歩旅行で足元を潰れ、阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。」

「一杯もわらわらない。阿部 隆正君と四十日に渡る徒歩旅行で足元を潰れ、阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。」

「一杯もわらわらない。阿部 隆正君と四十日に渡る徒歩旅行で足元を潰れ、阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。」

「一杯もわらわらない。阿部 隆正君と四十日に渡る徒歩旅行で足元を潰れ、阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。阿部 隆正君は一日十七里を歩いた。」

No. 52

刊夕

北越新報

春城漫談

市島一蔵



味を感ずる。犯罪には多くの場合、...

探偵趣味字彙

探偵趣味字彙の由来。探偵趣味は、...

探偵資料 泥棒や梅賊などの社会...

探偵趣味 趣味のわるい人物...

No. 51

刊夕

北越新報

春城漫談

市島一蔵



大陽気な大旅行で、洋服姿の...

旅の思ひ出

旅の思ひ出。旅の内、一瞬特別のものは大抵...

れこそ一文字金の余が大作の...

旅に入つてゐるが、鏡の外に...

旅の思ひ出。旅の内、一瞬特別のものは大抵...

夕刊

北越新報

発行所 新潟市 社址 新潟市 電話 二二七

No. 53

春城漫談

市井一畝



假名新聞二種
新聞紙の創刊は早く...

訓じてある。此の大きさは小察書
大にして三線を引いて四段とな...

坊録五十則
直で便利であるものが、どこにあ...

食物の國際化
鯉を味はふ人の最もましとする...

No. 54

春城漫談

市井一畝



重宝である。種々の「ペア」には...

銀座暗黒面
自分には誠実に足が銀座に向くが...

女からわたり連立つて何れかへ...

ない。只に女に戯れるのを興と...

青山無去時
田中半蔵はことし八十九歳の高...

食物の國際化
鯉を味はふ人の最もましとする...

寄劇雑草

見習習時記

北越新報

編輯 佐藤 吉留 印刷 市川 宗吉 發行所 北越新聞社

No. 53

春城漫談

市川宗吉

假名新聞二種



新聞紙の創設は早く歴史がある。明治となつては進々種々の新聞紙が出たが...

即ち一月をもつて東京に發行され、ボスターをも併せて所轄してある。この二つの新聞は今存すからこゝにその大略を掲げる。

如何にも行届いてゐる。これは東...

坊録五十則

これ等の内には今通用しない語もあるが、今日俗に勝手な字を添へて用ゐる言葉は...

これ等の内には今通用しない語もあるが、今日俗に勝手な字を添へて用ゐる言葉は...

北越新報

編輯 佐藤 吉留 印刷 市川 宗吉 發行所 北越新聞社

No. 54

春城漫談

市川宗吉

銀座暗黒面



東京に於て、種々の「バー」には、其の多きものがある。そのうちが、所謂「バー」である。一杯のウキス...

女から見たら、運れ立つて何れかへむくことになり、或は「バー」に備へてある秘密室に連れこんだり...

直で便利であるものが、どこにあるか。場に入る行きなり三三...

化 食物の國際

鮭を味はふ人の最もましとするはその鱒にある。あのやわらかな...

化 食物の國際

寄園雜草

兒童看時宅載

寄園雜草

兒童看時宅載

No. 56

春城漫談

大月 譯

市島長



〆と講つてゐる。大月、注意を
注したのは停車場の構造の粗だ。其の
粗は大小粗の相違こそあれ
全圖略に似てゐるのにならぬ。何と
〆と講つてゐる。大月、注意を
注したのは停車場の構造の粗だ。其の
粗は大小粗の相違こそあれ
全圖略に似てゐるのにならぬ。何と

刊夕

北越新報

編輯 藤野野矢
社報新越北

日丁二町上之坂市岡長

もいへな、味があつた。かゝる様
式は露西亞の田舎にありと聞か
自分を知るころでは大阪の久原
房之助氏の住宅の別荘内に、これ
と同じ様式の建物が六甲山に建
立してゐる。これは二階建ての
大規模のものであるが全部丸太
の柱、床、壁、天井、窓枠、置
かれてある椅子、テーブルの類ま
でも丸太を組み加へず、どこまで
も丸太の柱、床、壁、天井、窓枠、置
かれてある椅子、テーブルの類ま
でも丸太を組み加へず、どこまで

つても差支ないはずである。要
には統一に拘泥せず、地方の風土
によつて宜しきを採すべきだと
思ふ。これに就て思ひ起すのは
前年獨逸の邸宅に成つた青島の
ろくの邸宅を見た際のことであ
る。青島は石村の邸宅のところ
だけに、どんな家でも皆石造で
つたが、その邸宅は實に巧んで、公
署でも邸宅でも十數の建築の内
で、最も佳境に達したところと
言へる。其の邸宅は實に巧んで、公
署でも邸宅でも十數の建築の内
で、最も佳境に達したところと
言へる。其の邸宅は實に巧んで、公

しては、白石の俳句である。その
句は、
白茶や朝露消えて馬の骨
とあるが、これは白石の、
だといふまで、意味も、
もない。白石も終に芭蕉の節で
い事を自覚したか、或る時季の
隅谷より出で、春水に還るの意を
讀み、偶然然るところがあつて、
工夫すべきなりと、それよりは俳
句をビツカリ休めた。その頃、
な学者在田村才助の門下であつ
たと見えて、白石これを聞き、
どを詩才を持ちながら、俳句を
のの、春水より出で、隅谷に入
るといふが、多分よい事はあるま
いふが、多分よい事はあるま
いふが、多分よい事はあるま

刊夕

北越新報

編輯 藤野野矢
社報新越北

日丁二町上之坂市岡長

春城漫談

市島長

山陽の書幅



私が拙著『山陽漫筆』を見た事
が興となり、山陽の書の鑑定を
に來るものが少くない。同時に運
托するもので可なり閉口してゐるが
い。藝藝から見たもので、内
を擧げてみると、梅花未放香

上書いた一行幅は、山陽が有精川
宮の御息女に新年試筆の手本にと
書いて送上げたもので、書は上
來であるが、深意には御息女の雅
風があつて山陽の筆名はなかつた
お手本として送上げたものだけ
らかくあるべきはである。外に
梅花七絶を書いた一幅を見た。そ
の詩は山陽三十七歳の時の作で
の詩は山陽三十七歳の時の作で
の詩は山陽三十七歳の時の作で

もので起首に「有梅倚天香千尺」
とあつて六行に亙る行書であるが
讀破に寄たるの日、有り合せの
紙で臨すといふ。紙はドウサを
き金粉を施したもので、墨つぎが
よくないが山陽の眞蹟に相違ない
これにも長い誦語がある。
乙亥夏月 客於霞、國主人陳元
素書、偶有此紙、就試臨之、殊
覺其甚妙、臨拙甚、

せば、華やかなるありと無感、
に出でる。
羅馬法王と
ミル
一日、浮田博士と、時世の談話
を交へた。博士は羅馬に法王の居
を訪ふた時を語り出して
はる。

の席に就くのである。十ヶ月
出立するからして九月月ま
の所を定めてあるのだと聞い
一笑了。

吾今昔之懷也
この詩は誦語にある如く、梅に
て自家の心事を告白したもので
る。おなほ、詩の大意は、
もなく、
む事が、
やアロの中で十年を過したとの
懐であるが、山陽として、
の自である。そして、
んといふてゐるかといふと、
情が、
てから、
る。これは、
の、
る。山陽の、
るが、
い事が、
ので、
るものは、
である。私が、
を、
に、
る。山陽の、
の、
る。山陽の、
の、

北越新報

編輯 佐藤 印刷 佐藤
發行所 北越新聞社
社址 北越新聞社

春城漫談

市山一夫



山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

山陽の書幅
私が見た
山陽の書幅
私が見た

北越新報

編輯 佐藤 印刷 佐藤
發行所 北越新聞社
社址 北越新聞社

春城漫談

市山一夫

大月驛



大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

大月驛
甲州街道の驛に大月といふ
大月驛

寄附催草

兄背骨時三歳

寄附催草

兄背骨時三歳

羅馬法王とミル

羅馬法王とミル
一日浮田和郎博士と数時遊談
羅馬法王とミル

羅馬法王とミル
一日浮田和郎博士と数時遊談
羅馬法王とミル

北越新報

発行所 新潟市 北越新報社

春城漫談

公孫樹

公孫樹... 公孫樹の樹形が... 公孫樹の葉は...

公孫樹の樹形が... 公孫樹の葉は... 公孫樹の果実は...

公孫樹の樹形が... 公孫樹の葉は... 公孫樹の果実は...

江戸上り越後双六

江戸上り越後双六... 江戸上り越後双六の歴史...

北越新報

発行所 新潟市 北越新報社

春城漫談

平曲と高経

平曲と高経... 平曲と高経の歴史...

平曲と高経... 平曲と高経の歴史...

平曲と高経... 平曲と高経の歴史...

平曲と高経... 平曲と高経の歴史...



平曲と高経の歴史...

寄附雑誌

北越新報社

寄附雑誌

北越新報社



No. 60

春城漫談

市山と光悦

ハンタと光悦

日本には書物に興味をもち、書物漁り... 漢字と光悦

北越新報

吉田 藤 佐 編輯行發 人研研 印 局吉 目丁二町上之坂市河長 社報新西北 行所及

が、印刷者や父に持ち、幼少から古版が好きでワシントン時代の... 漢字と光悦

紙に對する愛護のない職人の造つたものでは気が持たぬ。印刷... 漢字と光悦

漢本といへば品格の上においては古版の上においても、宛然と頭地を... 漢字と光悦

北山寒巖 平賀内から洋書を師承した... 漢字と光悦

No. 59

春城漫談

市山と光悦

龜田鵬齋



龜田鵬齋は、三年も来てゐる... 漢字と光悦

日中の男を離して心せしめ、幾度も書き読み、其の一夜が... 漢字と光悦

り。直しとおもふもの出来ず、... 漢字と光悦

指紋 指紋は意匠の豊富を誇つてか決し... 漢字と光悦

醫學博士の 賭けごと 至つたが、よく昔からこの個人... 漢字と光悦

寄園新草

市山と光悦

No. 62

春城漫談

市井の藝術



市井の藝術
春城漫談
No. 62

は、石の彫刻といふてゐるがこれに似て足利義政金襴障子、小堀遠州の待賢宮の庭、今存してゐる樹木は、一も當時植えたものはない。これ等は年経て樹木を失つた

北越新報

編輯 佐藤吉留
発行所 北越新聞社
目下二町上之城市局長

外人が見た紅葉山人

外人が見た紅葉山人
尾崎紅葉の傳記 櫻痴 傳記の

は、雪が多過ぎて、かやうな庭に選けたのであつて、かやうな庭になると、庭全体が作家の作つたま

中に、露園土官のアイソオエフが紅葉山人を訪ねて、山人の生活をその頃、頃で發行されてゐた論文新聞に投稿した。それを譯せる

内子が小遣帳を新調して表紙に書を請ふので、いつも家用帳と書くのを戯れに「流轉簿」と書いて與へた。かねて何かの書に、早崎にあ

No. 61

春城漫談

市井の藝術



記はぶら下げてゐるがその大きさは全長一丈八寸五分で目方が百三十六斤。これを彫削したものは今

ち乗り、方角も鮮せず、運命を天に任せて、八丈島に漂着したのが、救命を得たので、この

北越新報

編輯 佐藤吉留
発行所 北越新聞社
目下二町上之城市局長

波多野承五郎氏の「春城漫談」を讀んで、自分の大層興味を興すに足ると

自分は大體記を讀むのを嗜み、いろいろの本を讀んでゐる。流轉簿の著者は大體その類を二にしてゐる

本邦櫻子の種類は頗る多い。本草家といへども、一々その種を記述する事だに、小野蘭山は、その時

内子が小遣帳を新調して表紙に書を請ふので、いつも家用帳と書くのを戯れに「流轉簿」と書いて與へた。かねて何かの書に、早崎にあ

随筆東海道
波多野承五郎氏の「春城漫談」を讀んで、自分の大層興味を興すに足ると

島生活
自分は流轉簿を讀むのを嗜み、いろいろの本を讀んでゐる。流轉簿の著者は大體その類を二にしてゐる

甘年の無人
自分は流轉簿を讀むのを嗜み、いろいろの本を讀んでゐる。流轉簿の著者は大體その類を二にしてゐる

流轉簿
内子が小遣帳を新調して表紙に書を請ふので、いつも家用帳と書くのを戯れに「流轉簿」と書いて與へた。かねて何かの書に、早崎にあ

青園新報
用者看請室

刊夕

北越新報

行社 編輯 佐藤吉郎 市川町上之坂市岡長 社報新西北 所行

No. 63

春城漫談

市川文豪

山岳形態論



伊東忠雄氏の旅行記に、わが山に... 山岳形態論の序文部分。山岳の形成と地質学的考察について述べている。

山岳に用ゆるは、腐したりと謂ふべき也。これは吾輩も同意である。山岳の形成は地質学的に複雑な過程を経る。

官營宣傳 日本でも外人客を誘致するために... 官營宣傳の現状と今後の展望について述べている。

字眼 川柳にも俳句にも必ず字眼がある... 文学的な表現における「字眼」の重要性を論じている。

安價文學 世帯に選ばれた一年間日本に選ばれた... 安價文學の普及とその社会的意義について述べている。

刊夕

北越新報

行社 編輯 佐藤吉郎 市川町上之坂市岡長 社報新西北 所行

No. 64

春城漫談

市川文豪



名家の家屋土地などを有する... 名家の家屋土地などを有する者について述べている。

坪内文豪の心事 名家の家屋土地などを有する者... 坪内文豪の心事について述べている。

左派のマツチ 左派の赤化運動も手をかへ品を... 左派の赤化運動について述べている。

字眼 川柳にも俳句にも必ず字眼がある... 文学的な表現における「字眼」の重要性を論じている。

寄園雑草

兎首言詩草

寄園雑草

兎首言詩草

北越新報

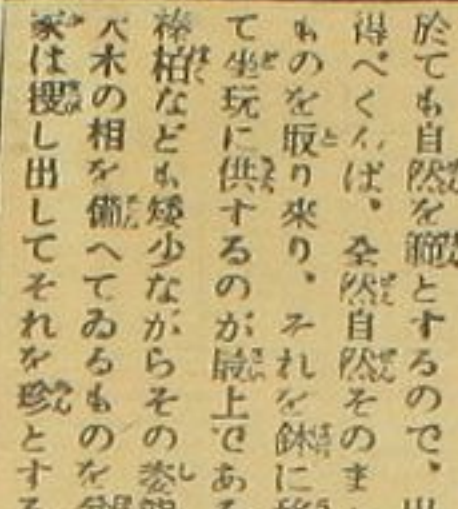
昭和六年二月二十二日 第69号

No. 69

春城漫談

市山

自然を愛する日本人の趣味 (下)



於ても自然を愛するもので、出来得べくば、全然自然のままのものを取り取り、それを鉢に移して生玩に供するのが癖上である。

ふて二年も三年も苦心して育てあける。勿論花を愛する暇その他のものもあつて、種々雑多であるがこれを愛するには其植物に相應する土質も考へねばならず、肥料も選ばねばならぬ。

ことであるが、どうかすると田舎道に勿論なやうな砂浜りのよい姿勢の庭に土に出遇ふことがある。

枯死するかも知れぬ、それを救立て救ひ上げそれを保護して姿容を直したり、動もすれば枯木に花を發させたりして人間の趣味に投じてやうとするのが、何故に自然を愛するといふのであろうか。

の庭を愛することにしてゐるか、亦或る流儀は庭を旨とし、家庭や庭や水車や舟などの小庭をあらうものもある。砂も白色に限らず他の色を採用するものもある。



かゝるものは高山の絶壁などに僅に見出し得るもので、捜すことも容易でなく探取にも危険があるから、實際愛するに難い自然のもの、まゝのものを得ることは困難である。随つて盆栽家は較々絶致の癖を取り取り、それを如に培

何人も旅行などの場合に氣のつく

れず多くの盆栽植物に匿せられて枯死するかも知れぬ、それを救立て救ひ上げそれを保護して姿容を直したり、動もすれば枯木に花を發させたりして人間の趣味に投じてやうとするのが、何故に自然を愛するといふのであろうか。

の庭を愛することにしてゐるか、亦或る流儀は庭を旨とし、家庭や庭や水車や舟などの小庭をあらうものもある。砂も白色に限らず他の色を採用するものもある。

の庭を愛することにしてゐるか、亦或る流儀は庭を旨とし、家庭や庭や水車や舟などの小庭をあらうものもある。砂も白色に限らず他の色を採用するものもある。

No. 70

春城漫談

市山



山東京山は越後をどう見たか

して書架より北越雪譜を抽いて翻してあるから愛には省くが、久方讀す。此書前後二篇あり、前篇は天保六年に出版され後篇は天保十一年に出版されてゐる。此書は事やつて来て、始めて雪國の風物に

昨夜来都下種有の降雪と交通風など社絶外出も出来ぬから、爐を確

や、苦泊などにも一泊を期したのであるが、船の傍に四十日高と

もしてゐないが、最極に感じたこととは、雪路が草鞋を穿き一行と共に達者に歩ける状態であつた。

ことがあつた。此西洋人はいつも娘が辭し去る時、戸口まで送り出すのが癖で、戸口に説くのである下駄を履かせる時云ふには、日本の靴は鼻緒に色紙があり、且つ時々いろ／＼なのと取かへてくるから氣分がよいと云ふた。亦月餅を出すには男性の靴は無難に買幣をひき出して渡したり、或は封筒に入れて出したたりするの出すのが癖であつた。外人はそれがいと云ふて、日本婦人は襦袢が厚いと喜んだ。襦袢は彼等の感懐にもよい様子である。此外人は日本婦人の喜怒哀樂の状を如何に評したかと云ふと、外國の婦人は笑ひ顔には美があるが、日本婦人は逆で、笑ふと醜いと云ふた。大きな口をしまりもなくあけるからであらう。日本婦人の美は寧ろ泣く時にあると云ふてあつた。此外人の見方に理があるやうだ。此婦人は久しく日本にあつて日本の風俗には相當諳識があつたことを附け加へておく。

奇劇催草

見習書目時

寄園新草

那情看詩室



No. 72

春城漫談

市山一風

條約改正の

今でも思ひ出すと無説で耐らないのは... 大隈侯の條約改正の悲愴の断末である...

北越新報

社報 報通北 社行 報通北 社行

この面々は私の身を擁護してくれて... 萬端であった。實は如何なる場合でも...

會をひらく日都合で自分も頼んだ... 前に自分を頼んだ。頼んだ。頼んだ。...

めに頼まれたもの... 頼まれたもの。頼まれたもの。...



No. 71

春城漫談

市山一風

世界文學變

近五七十年來の文學界の一大不思議... といふべきは、文明の程度に於ては...

家を出し、ポーランドではプロック... の如き将たブランドスの如き又...

したのはこれが爲めであらう。イ... プセンなどにしてスカンデナビ...

に頼まれたもの... 頼まれたもの。頼まれたもの。...

新聞雑誌

新聞雑誌

新聞雑誌

新聞雑誌

日新報

第...号
日新報社
日新報社

漫談

世界文學變遷の一考察

五十七年來の世界文學の變遷を考察するに於ては、文學の歴史を、文學の進歩の歴史と見做さなければならぬ。文學の進歩は、文學の歴史の進歩である。文學の歴史は、文學の進歩の歴史である。文學の進歩は、文學の歴史の進歩である。文學の歴史は、文學の進歩の歴史である。

文學の歴史は、文學の進歩の歴史である。文學の進歩は、文學の歴史の進歩である。文學の歴史は、文學の進歩の歴史である。文學の進歩は、文學の歴史の進歩である。文學の歴史は、文學の進歩の歴史である。文學の進歩は、文學の歴史の進歩である。

漫談

日新報社

漫談

條約改正の斷末

今でも思ひ出すと無情で耐えないのは、大隈侯の條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

この頃、大隈侯の断末は、大隈侯の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

大隈侯の断末は、大隈侯の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。大隈侯は、條約改正の断末である。

日新報社

日新報社

北越新報

No. 73

春城漫談

活人畫



今は故人となつた、明治維新の志士、
活人畫の作者、
この活人畫は、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、

活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、
活人畫の作者、

大地震と復興

北越新報

No. 74

春城漫談

市の上登攀



市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀

市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀
市の上登攀

支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁
支那の墨汁

山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓
山鹿素行の墓

藝の秘訣

藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣
藝の秘訣

黙

黙
黙
黙
黙
黙
黙
黙
黙
黙
黙

寄園雜草

兎首詩

寄園雜草

朋帖看詩室

北越新報

No. 73

春城漫談

活人畫



今は故人となつ、諱命書家福田半吉氏
宅の新年會に招かれて、活人畫と云
ふを見せられたことがある。これは茶
番のやうなもので、幕を張つて、その
下方の切れ目から、男女さまさまの人
の脚部の行状を覗ける體向で、眺
みもあれば、下駄穿きも、靴はき
ささる外に、脚部にも脚絆が

るかと思へば、腕巻の垂れ下つた
のもあり、洋服のスカートもあり
袴のすそも見えたり、優雅な脚の
襪の引ずりも見えりと云ふやうな
體向で、引きも切らず走馬燈のこ
とと足の影下に運ばれるのを見る
と、如何に大勢か参加してゐるか
と思はせるが其實さまで多くな
い人数が暗に脚部の行状を覗
て見たまふのであるが、その
の足を覗いて武骨男であらうと思
したり、美人であらうと思つた
り、脚が見えなからシレッとした
つてゐる態度で、誰か何かを運
つてゐる態度で、斯る態度はな
なかに羊躰であるために、覗客は
の態度の直に對することを憎く思
ふ。そこで彼れも且く其の態度を

行状は古くから日本に行はれて
あるもので、坪内逍遙博士も幼少
の折、土で見たと語られたが、嘗
て紅葉山人は尋常新聞紙上に脚
下の露のみを擲つてゐる。思
ふに、思ふに、此の半身行状から思
ひつたに、脚部はあつたらうと思
ふ。今日このやうな體向を思ふ
と、脚部の露があるやうだが、一第
一は足と云ふ脚部の露もある位
婦人はスカートが高く吊り上げて
足の露を露示する世の中であるこ
とを思ふと、婦人だけの足部の露
となつて、活人畫式によつて見るの
一顧であるまいか。

藝の秘訣

月に渡雲と云ふは邪鬼を撃つた言
葉であるが、戲臺も時に依つては
却て脚部の露を露示する。演具
となつて珍重がらるる場合がある
「露折々人をなます月日」の俳
句は則ち此間の消息を窺つたもの
である。

話をやつても、覗客は決して脚の
露をすることが無いが、之れに反して
覗客が露を露示する。覗客の露は脚
部が露である。覗客の露は脚部
が露である。覗客の露は脚部が露
である。覗客の露は脚部が露であ
る。覗客の露は脚部が露である。

黙禱

西洋には戲死など、對し時間
を定めて、固執するの慣習ある
ことは世人皆知の事であるが、嘗
て坪内和博博士が英中にも此
事があつたと語られた。話による
と、其日午後十一時の後二分間
を定めたが、鐘聲も電報もあつた
事ありしに、固執して、市中の歩行者
までもこの二分間はあつた運動
を停止して、固執した。此
の二分間は固執して、固執して
如何にも對峙の感に打たれたと言
ふ。これは固執の規模、瀕する
ものであるが、我輩でも「黙想」と言
ふことで學んでよい事と感した。

大地震と復具

北越新報

No. 74

春城漫談

市上登攀



然るに近頃、屋上登攀の四字が
往々目に觸れる。誰であつたか
シナ感の露物を著し、新聞の版
面に載せた事がある。しかし格別
氣にも留めなかつたが、山登攀
の登攀と云ふのを聞き、初めて屋
上登攀が山登攀に類する事を知つた。
いものである事を知つた。屋上登

近年、洋服や百貨店で高層ビルデ
ングを建てるやうになつてから六七階か
ら身を投ずるものが頻々としてある。
悲惨な事ではあるが、高層ビルデング
として墜落するのは奇とするに足らぬ
か、墜落するの逆をやめるものである
か、日本では七八階以上の屋上はない
が、外洋には五十階五六十階以上の
高層ビルがある。しかし格別、地上で
見るに驚かすものがある。

支那の墨汁
支那は流石に文藝の國である。北

山鹿素行の墓

山鹿素行の墓が、近く牛込大町
家等内にある事がかつたので
早稲田八勝を運むに方つてその
中へ加へやうとしたのであつたが
栗さなかつたのを遺憾とする。
(明治四一、一一)

平に墨汁のみを發賣する店(傳
聞)があつて、他の墨汁は一切置か
ぬ。その墨汁はどんな價かといふ
に、十匁五匁といふが最も上等な
ものだといふ。少しくよくなる
十匁位はする。それより以上十
匁も二十匁もある。日本では墨
汁に入る墨は普通なんでもよいや
うに思はれてゐるが、支那はそう
でない。随分墨汁で文人が揮毫も
するからよくなければならぬ。外
ではあるが、日本から見ると、外
へあるが、墨汁の價からい
るとこれは墨汁のやうなものだとい
ふ。この墨汁から相當の墨汁を
製ふと、墨汁といふ冊子を廣
告かたし、賣物にされる。また墨
汁が乾くと一回だけこれを直し
てくれる。すなはちよく墨汁
を購ふてくれるといふ。これは書
文家室の話だ。

寄附催草

兒童會寺堂戲

寄附催草

兒童會寺堂戲

北越新報

No. 75

春城漫談

市市表



この高華の神運寺、云へるは和氣の松名が草創、かくる四百餘年の古刹なるが、伽藍頗く破

文覺破天荒の勸進

閉じて大町、月君の書き直したる源平物語を讀み、文覺の條に至つて、寄附の事案にかゝる家ものもあつたかと、一笑了。その條は、

御所法住寺殿にまゐり御願の由言上せるが、御遊の折柄なるに依て奉者由を申入れず。文覺終日待らあぐみては天付不當の狂骨を罵りやして、案内もな

梅干禮讚
日露戰役日本が勝つたのは世界の驚異を博した。その原因については西洋人はいろいろと察したが、

ある。佐藤正といふ陸軍は鬼隊軍といはれたが、この人は日露の戦

東西相觸れて
新羅士の近著に「東西相觸れて」といふのがある。これ東洋

即位式：呈しつる儀表の加尺表

夕刊 北越新報

No. 76

春城漫談

市市表



温浴史

日本の風呂の歴史も溯れば古いものである。上代の風習其他を傳へてあると云はれると、三股が設けられるのが、但だが三股の其一、同立股は即ち浴槽である。神祇をみづから司らせら

しかし風呂も遂には享樂の爲めになる事になった。いつごろからの事か云ふことは分らないが、豊太閤が、

新羅士であつたが、あれなどもむし風呂の名残りを留めたものであらう。今でも田舎に種々の儀式のむし風呂が残つてゐる。釜の上

夏目漱石
これも夏目漱石が、嘗て英に遊んだ時の記録であるが、讀んでみて如何に外人に自然愛の乏しい事かが、知られた。

奇聞雑草

兎首寺怪談

奇聞雑草

兎首寺怪談

刊夕

北越新報

社報新日北

No. 78

春城漫談

市島長



大隈侯談片
一日大隈侯を評した...

ながら今では飛行機の數に於て
れを取らぬに至つた。

古梅園の墨譜を讀む

古梅園墨譜正續二篇を久し振りで
讀んでみて多少の興を感じた。

奇蹟唯草

時評

No. 77

春城漫談

市島長



詩畫その本領を異にす

詩と畫とはその本領
詩と畫とはその本領
詩と畫とはその本領

その本領に當るものだが
實際は詩が長く、支那でも明清
あたりから、漸く畫によつてはまる

射の商人は皆成功する。一旦乘り
上げた基礎を失ふ事は萬々ない。

冠年侯日宮が英領に開催中の日英
博覽會を通訪問の折の記事が、大
江州商人の成功秘訣

江州商人の成功秘訣
津田五郎といふ大阪の穀物商人
の語るに、大阪に於ける江州出

色方...

用中...

No. 80

春城漫談

市島一蔵

死線徂徠



死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

何人も多少恐怖の感をまぬかれな
い。坑道の坑道であらう。エレベ
ーターで暗中何千尺も下る時は所
におちるやうな心地がする。空気が
かなり冷かになり、氣息がきつと
なり冷かになり、氣息がきつと
なり冷かになり、氣息がきつと

死線徂徠 二
死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

夕刊

北越新報

所行發 岡長 株
目丁上之坂市岡長 式
社報新越北社 社 式 株
郎吉留藤佐 人 行 發

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

No. 79

春城漫談

市島一蔵

死線徂徠



死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

夕刊

北越新報

所行發 岡長 株
目丁上之坂市岡長 式
社報新越北社 社 式 株
郎吉留藤佐 人 行 發

死線の時のやうな気がする。自分
は足尾の山も佐渡の山も入つてみたが、どこにも同じ
感があつた。坑道と似てゐる。冷
気も襲ひ来る。船の前面に提灯
もはつた。坑道も同様である。一際
暗い事は坑道も同様である。一際
の水道をたどるので、前方から來

春城漫談

市島一蔵

死線徂徠

北越新報

No. 79

春城漫談

市の夜

死線徂徠



過去六十餘年の生涯の中で死生の間...

四季

眠る自分においても多少の危機...

No. 80

北越新報

發行所 北越新報社

春城漫談

市の夜

死線徂徠



何人も多少長年の感をもぬかれない...

死線徂徠... 人の死は、前夜トラックで貨物...

新報雑誌

新報雑誌

No. 82

刊夕

北越新報

所行發 町市岡 社報新 報吉留

春城漫談

市の表

進献本と献題



日本の海蔵本はいくらかあるが、先づ以上止め、さらに外國の海蔵本を...

でない。由來進献は一種の敬語であつて、目上に対して多く用ゐられる語だが、廣い意味で進献の場合をいふと...

少なくなつた。書肆はその容態に對し種々の豆本を撰つて海蔵した。私の所蔵してゐるのはダンテのデプライン、コメデーであるが...

No. 81

刊夕

北越新報

所行發 町市岡 社報新 報吉留

春城漫談

市の表

進献本と献題



た。私は今海蔵の沿革を述べる用意と暇がないが、おそろしく佛に海蔵する事が最も古くから行はれて...

不圖東洋閣下之命、來就我家。取所著私史、欲即覽閱、禮書服。動、懷悚交至、夫豈不取求於閣下、而閣下求於我、裏之愛大矣。復何所感而辭謝乎。

右の如く海蔵を撰する事は支那には多く例があるが、日本においては、手近の例は林道春が正保年間に日本史の國史を參考し、...

寄園雜草

見眉言時電載

寄園雜草

見眉言時電載



No. 83
発行所: 北越新聞社
印刷所: 北越新聞社

春城漫談

母
雪江の物語
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。



雪江の物語

その一歩大きい歩は、雪江の物語にも、雪江よりも、ある個人の胸に自分の人種を認み込んで死んでゆくことだ。雪江は母を地上に留めて死にたいのだ。

この人格的母として、最も生かすに、最も愛するものは母が子の胸の中に燃きつけた愛の烙印だ。その烙印が、子孫から子孫へと傳つていて、そこに人間性の地上における不朽の刻が現はれる。

母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

母の物語
雪江の物語

母の物語
雪江の物語

母の物語
雪江の物語



No. 84
発行所: 北越新聞社
印刷所: 北越新聞社

春城漫談

納豆
市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。



毎年の暮方より種々の物を贈られる中に、郷國から寄るものもある。そのうちに納豆のものがある。納豆の製法は、昔から納豆を作つて百の年たつて来た。百とすると、

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

納豆
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

市山
我が母の物語は、雪江の物語に似ている。母は誰れ一人として、この世に死んでゆくのではない。何かの足踏を待たせて死にたいのだ。何かの印を待たせて死にたいのだ。

刊夕

北越新報

No. 91

春城漫談

市時表

國禁切支丹



からし 諸君に遭つても、他人もその意志を奪はず、小兒までも從容死に就たといふ事はほとんど信じ難い事であるが、しかしそれが事實である。

メンは、なんの効力もないはずである。さすがにこの異教徒を聞かする癖に當つた行幸は、どうもこれは考へものだといふ事に氣がついて、この諸君の法を改めた

日本はどんなになつたか。これがために日本の文化は、どんなに世にだであらうといふやうな方面までも、道で研究を要する事である

貴女の友

本野(一) 露國大使が歸朝したので、露國新聞に關係をもつ露國人高田早苗、松平康徳、増田義一、石井勇、藤原辰次郎それに自分とが紅雲館に小會を開いて、本野大

刊夕

北越新報

No. 92

春城漫談

市時表

舞臺裝置の新傾向



と相通じ正座の座下の下に指路があつて一瞥はこの指路から、旅籠のものは左右の脚裏から演舞を見物した。それがそもそもの初め

各國と實質本位となり、非常な影響を投ずるのでなくは、實は工作り得ざる事となつたが、實は工業も進歩し、そして一面には民衆の望みに聞はんには貴族的の舞臺を多く作る事も不可能に感ずし、ここに舞臺裝置を工せざるを得ざる事となつた。すなはちこの傾向は早く大戦當時において既にあらはれ、戦後はますますその傾向を實地にあらはすに至つた

アノールマルのからだの格好といはれた安西久保保正は、佐賀出身の大隈内閣の陸軍視察隊たりし若年か、おもしろき男だ。學生時代學費に際してある程放蕩り

請調雜草

祝詣特電職

寄園雜草

那中春詩空

北越新報

No. 93

春城漫談



市島表

盲啞校見學

前島老人故前島男爵のために盲啞校を起さんとて、自分活動となりこの頃...

校地の多量式の決断

市島表

は學力に伴はざる事も論じて、高級の生徒却て普通細なく下級の多くの學生の中には...

北越新報

No. 94

春城漫談



市島表

地圖の色塗

世界の大戰後において世界地圖は一變した。強國の國境に獨立したるものあり、平和會議において國境の統治下に...

李龍眠の横

この頃、龍眠の横に於いて民間に出たとして、龍眠の横に於いて民間に出たとして、龍眠の横に於いて民間に出たとして...

高田事件

高田事件といふは、戦後高田の疑獄で、龍眠自由黨の行動が國事罪として...

新編維新

新編維新

北越新報

第94号

春城漫談



市島校長見學

前島校長見學のため白鷺會を起さんとて、自分共となりて...

市島校長見學

市島校長見學のため白鷺會を起さんとて、自分共となりて...

北越新報

春城漫談



市島校長見學

世界の大戦後において世界地圖は一變した。確固の國境を失ひたつた...

はかりでなく、列強の勢力が變つた結果として新たに頭をもたげた...

李龍眠の横

この頃、龍眠の腕に纏れて民田に出た。龍眠の腕に纏れて民田に出た...

高田事件

高田事件といふは、越後高田の騒動である。高田事件といふは、越後高田の騒動...

壽司雜草

壽司雜草

服中春請三痛

北越新報

所行發 局長 行發 社報 目二町新 社報 郎吉留 郎吉留

No. 95

春城漫談

美術品の海外流出



日本美術品が海外に取去られて日本は空虚となるだらうといはれた事がある。一時西洋の文化に心を配った頃、その反動で日本の美術品は二三の美術品が海外に取去られた事がある。...

と、日本の外人相手の商人が正しくなく外人の鑑賞ののみに乗じて、美術品や古物を流すかまざるのどで、海外市場は流出してゐない。...

だといふのである。西洋へ出かけるといふのは、山ありの地の博物館を訪ふ人も少なくない。...

べしといふ。しかし、戦時下のものは海外へ一時たりとも寄託する事は危険な事といへない。...

面額が約九千圓、購数が三千、従員が二十萬人、車輦の数が八萬、そして運輸の収入が五億圓といふ大なる世帯である。...

No. 96

春城漫談

市内道遙翁の文藝談



春城漫談、日本の小説は多く西洋に近いかいものである。源氏物語の西遊記は全篇の範疇外であるが、他は概ねその形式文体の如何に拘はらずに、...

色に初、中、終の形式が必要と日本小説家が考へたばかりでなく、西洋でも、スコットやリットンなどは皆そうであった。...

といふは努力といふばかりではない。馬鹿の如きは努力はあれども、文學者としての意識はない。...

予傑を藉りて脱却した。曰く田中、曰く宗十郎の如しと、田中、曰く宗十郎の如しと、田中、曰く宗十郎の如しと、...

田中、曰く宗十郎の如しと、田中、曰く宗十郎の如しと、田中、曰く宗十郎の如しと、...

詩詞雜草

説書詩詞

寄園雜草

用中詩詞

北越新報

發行所 東京市北區西新井
社 北越新聞社
社長 佐藤 吉郎
編輯 藤田 吉郎
印刷 北越印刷局

No. 95

春城漫談

美術品の海外流出



日本の美術品が海外に取られていくのは、最近の事である。一時は西洋の文化に二、三の差があったが、今は、西洋の文化に二、三の差がある。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

だといふのである。西洋へ出かける人は、山ありきの地の博物館を、訪ふ人も少なくない。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

No. 96

春城漫談

坪内逍遙翁の文藝談



逍遙翁曰く、日本の小説は多く、西洋の小説に近しいものである。...

色に初、中、終の形式が必要と日本小説家が考へたばかりでなく、西洋でも、スコットやリットンなどは皆そうであった。...

といふは努力といふばかりではない。努力の如きは努力はあれども、文章者としての意識はない。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

と、日本の外人相手の商人が正しく、外人の意識のないのに乗じて、美術品や古物をつかまざる。...

新刊雑誌

新刊雑誌

年六和昭 (可認物便郵種三第)

刊夕
北越新報

No. 97

春城漫談

希土の住民
交換



ト教徒と回々教徒とが、互に入り交つて来た。その結果異なる事...

世界の大戰争が起つた事のうちには、國境の住民の交換を第一の目的とする事がある。それは希土の住民の交換である...

舊縣令の古馬車

明治五年東京前に最初の警察署を設けた事につき、その頃の話を...

事の述べ出される如く、幾千の家族が雨露を憂ふ事も出来ず、ステーキ...

断 アラビヤ横 断に四十日かゝつたアラビヤの大沙漠も、今は自動車で廿四時間...

No. 98

刊夕
北越新報

春城漫談

希土の住民
交換



ト教徒と回々教徒とが、互に入り交つて来た。その結果異なる事...

世界の大戰争が起つた事のうちには、國境の住民の交換を第一の目的とする事がある...

純日本趣味

外國に旅行した人があつて、中央ヨーロッパに家や友人、知己が...

想像以外支那は大

普通支那には誇張の言辭が多いが、それが却て誇張があつてよい...

新開報

説語奇特室藏

新開報

説語奇特室藏

北越新報

本報發行所
北越新報社
社長 佐藤 武夫
編輯 佐藤 武夫
印刷 北越印刷局
電話 二一〇番

春城漫談

希土の住民交換

世界の大戰が起つた後、希土の住民交換が實現された。これは、國際的住民の交換を第一に圖つてゐる。それは、希土兩國の住民の交換である。これまで兩國にはギリヤシヤの事案で、土耳其政府も長い期間、希土の住民交換に苦しんでゐた。然るに、世界大戰の終結後、希臘の土民は、土耳其に渡つて、土耳其の土民は、希臘に渡つて、互に領土を交換する事に決つた。...

舊縣令の古馬車

明治五年、東京に最初の自動車製造工場が設立された。その頃、古馬車は、日本の主要な交通手段であつた。古馬車は、馬を動かすことで動く。その構造は、非常に単純である。古馬車は、日本の交通手段として、長い歴史を歩いてきた。...

アラビア横断

アラビア横断は、長い歴史を持つ。アラビア半島の横断は、交通の要路である。アラビア横断は、日本の交通手段として、重要な役割を果たしてきた。...

北越新報

本報發行所
北越新報社
社長 佐藤 武夫
編輯 佐藤 武夫
印刷 北越印刷局
電話 二一〇番

春城漫談

市市主義

余は、市市主義を漁り、かつ、市市主義を論じてゐる。市市主義とは、市市を重視する考え方である。市市主義は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...

純日本趣味

純日本趣味とは、日本の伝統文化を愛する気持ちである。純日本趣味は、日本の文化を大切にすることを意味する。純日本趣味は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...

想像以外支那は大

想像以外支那は大。支那は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。支那は、日本の文化を大切にすることを意味する。支那は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...

市市主義

市市主義とは、市市を重視する考え方である。市市主義は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...

純日本趣味

純日本趣味とは、日本の伝統文化を愛する気持ちである。純日本趣味は、日本の文化を大切にすることを意味する。純日本趣味は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...

想像以外支那は大

想像以外支那は大。支那は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。支那は、日本の文化を大切にすることを意味する。支那は、日本の発展に重要な役割を果たしてきた。...



市亭種彦

柳亭種彦の手紙

だ水滸の意をうけて作をする心
もろが、かんじり也。小子の六
十丁のうち梅志が引ける事をい
ふ條に、左りのかいなは大山を
のするばかりに、云々。右のこ

はまりたるにて、あはれは
なく作なり。と、梅志が引
てそのまゝには書け不申、書い
たところが、それではうれず、
「林沖が骨こゝにありきだつて
ひろへ」など、水滸にはなき作
文なり。いろ／＼御問合せの事
小説よみにうけ給はり、あとよ
り申いるべく候へども、これも
人々にてあがひ、やはりあてに
ならぬ物に御座候。

この一節は漢文小説の譯し方につ
いて一步を進め、どうせ作をする
つもりで書くが肝煎なりといひ、
梅志が引を射るところだけは柳亭
も得意であるらしく、特にそれを
擧げて自語自讃をやつてゐる。手
紙のおもしろ味はこんなところに
あるのだ。

○梅の謎と云ふ字にでもか
へ、先登堂といたしおき可申
候。他人は此やうな事突ひ可申候へ
ども、小子は一向笑はず。小子
角力さうらひにて、角力の事一向
書き不申。甲州侍ゆゑ、梅志君の
事わろくか、川柳野には、
君をほめた句でなければ、
たし不申。近年水天宮信心にて
平家ほつらくの事を書くまいと
願をかけ申候。いと馬鹿／＼し
き事なり。

この節の梅の姓云々のところは不
明である。柳亭が角力梅ひのこと
甲州侍であるから、梅志君のこと
水滸を信心するから、平家源入水
の事を書くまいと、梅志君、皆
この手紙で知る柳亭のおもしろい
逸事である。

水滸はまづ申上候。今一奴、
四十丁御書可被下候。今一奴、
らるはあけられ可申候。
竹に雀を校合いたし、高工の方
へまゐりを申候。是は別便
にて可申上候。
御きらひなる物、妻も幼年のと
き、きらひにて戸開へかかれ、

No. 99
春城漫談

北越新報

所行發
目町新 社報
那吉留 印入



市亭種彦

春城漫談

北越新報

所行發
目町新 社報
那吉留 印入

随つてあの人、聖蹟の傳つてゐる
ものは種々少ない。然るに聖蹟
ゐる事がある。それは二代種彦と

柳亭種彦の
手紙
柳亭種彦は田舎流氏を書いて一世を風
靡した位であるのに、字を書く事が拙
であつたので、手紙なども已むを得な
い場合でなければ避けて書かなかつた
。村は皆て種彦の長簡一通を藏して
望んで居たが、数年の後に
よきない事でも成して成る人が珍
識したるも、大層大層に喜びが今

いはれた噂人仙果に與へたもので
仙果はその名古屋にゐたので、
宛がら面談に代るやうに懇切に物
を教へてをり、水滸傳反譯の事や
自家の家傳の事、殊に雷を恐る
ので、種彦の神簡としては珍しい
ものであつた。要するにふにはこ
の書簡の巻物は無名氏から寄せら
れたもので、今になつても送つた
人がおられないといふであらう。そ
の頃自分は多く名流の書簡を集め
てゐた體であつたから、強ひて送
つて来た體であつたが、数年の後に
よきない事でも成して成る人が珍
識したるも、大層大層に喜びが今

は天壇に存在してゐない事を思
ふと、梅志に堪へない。この頃當
時の筆を讀んで見ると、幸ひに
その算を取つて置いたのを發見し
た。文通は長いが、種彦研究にと
つては好材料であらうから、多少
の註を加へて全文を掲げる事にし
た。

擬便の方さへ、早便の方は廿
九日書過に相届。朝日御返事認
申候。文章の事、京山子との事
あまり木朝の俗語多く、水滸傳
らしくなきといふ評判なり。七
編よりさる人をたのみ、讀し申
候。すでに種彦二十丁出来候處
これは二に俗語甚しく、「此
はつつけやう」小書には「
そでもくへ」など、といふさ
へあり。これでは實れぬといふ
へ、板元より少々の筆料おくり
、小子をたのみ書直し候なり
書ぶりの事は小子のおまゐり候
間傳へ不申、俗語かならひに
て口、の紙承知いたし

申候。梅志云、この邊少し
解し難きところあり。讀しにあ
け候ところが往來二百里の事ゆ
ゑ、これは先づ此儘にて、あま
り早立ら候處は小子書直し可申
「カ、ア」と云ふ事を女房と云
ふ位の事也。
京山の水滸傳譯板元に寫されず終
に種彦を短すに至りたること、こ
の文によつて明かである。餘り日
本の俗語が讀出し、水滸傳しか
らずといふが、板元の苦情なる事
この手紙で知らる。察するところ
種彦は依願を受けたけれども、自
ら譯する事をせず、仙果に譯さ
る事にしたと見へる。名古屋と
戸の間三百里も隔たりをれば、直
江しを頼まれたところは取て貴所を
種彦に、自から加筆すべしとあ
り。

十一編よりは今少しまじめなる
文章のたかたかよるべく存じ候
しかなかたがよもゆかず、御見
はからひなるべく候。
種彦の事、よいこゝろに御苦しみ

夜着をかぶり、癪をおこしなど
いたし候よし。ある人それは何
々の弟子になるがよとおしへ
申候。其法六月朔日、赤の飯に
備へ餅、豆、酒、御酒四色そなへ
あなたのお弟子になさうござ
りませと、おがみ、此四色他人
に喰せず、自ら一人にて喰ふな
り。如此いたし候後段々こほく
なくなり、只今にてはあまり要
き日には小子へむかひ、小座に
て、ちつと立てもあればよろ
ござるなあと、いふくらゐ、平氣
になり申候。
（註）小座とは、毘がきらひゆ
ゑそれへはさかり、男女のあ
まり平氣もにくらしき物ゆゑ
なるべし。

此弟子にならぬ前は、そのおそ
る事狂亂の如くなりしと申上
り候。小子も實は好き不申候へ
ども、侍のおそるは見ぐるし
きものゆゑ、つゝしみる／＼いた
し今ではまづ平氣のやうな願な
り。

この一節柳亭の妻が雷をおそる事
をいふのであるが、仙果も矢張り

なざるべく、わけがわかつて置
れさへすればどうでもよし。た
ゞ種彦本で書とだに見へねばよ
。小子も本家内の事ゆゑ、小
説よりの所へ着代をもちて聞に
まゐり申候。林沖のち候花鳥
一人の小説よみは、手簡といひ
一人の小説よみは、手簡といひ
候。林沖刀は買候へども、筆を賣
ひしはなしし。此簡とてから
もつてきたか知れず。
曲亭子（馬琴）は刀といつしよ
に簡も買はせ候やうにおほせ申
候。これも出所にこまつての事
なるべし。
一人の小説よみ曰、かざり簡と
いへども身のなき簡にはあらず
此簡の出所のないのは、馬琴二
やをまるものにて用心の爲、
簡をふる事なり。漢ではだれ
でも知つてゐる事ゆゑ、その出
所を知らぬなりと云々。そか
も知らぬと尤もらしき事ゆゑ、
原本にはなき事ながら林沖が、
簡り簡をもちたるを小子は

新劇雑誌

説書新特空城

新劇雑誌

説書新特空城

Blank grid area for writing on the right page.

Blank grid area for writing on the left page.

以下
4 丁
白紙

寄園雜草

卷之三

寄園雜草

卷之三

傳言

地理氣候

二風景

三四季

五史蹟

六寺觀

七宗廟感化

八藝事術

